

六月興り

文楽座人形浄瑠璃



真昼

一部金十五銭

文楽座 四ッ稿

青葉の六月に輝く

郷土藝術の粹

青葉の香りよろしき候いよ／＼御壯健に爲らせられお欣び申上げます。偕て、當文樂座の六月興行は古軼太夫が今度初役として二十八年振に「荳葉桑門筑紫驛」を上演、其他名だたる大作に若手連の興味ある配役に、更に巨豪土佐太夫が折紙附の「酒屋」の逸品を上場する等文樂秘藏の曲目に豪華を飾るもの今や政府の保護案も決定し、傍々「文樂協會」の設立をも觀るなごわが大阪の持つ郷土藝術は愈々積極的進展の域に達し向後の文樂は一層御期待に酬ひ得る事となりました、珍らしい興味に溢る六月の文樂への御支援をお希致します。

昭和八年六月

文樂座

昭和八年六月一日初日

毎日午後三時開幕

御観覽料

- 一等椅子席 御一名—金二圓五十錢
- 二等席 御一名—金一圓
- 三等席 御一名—金五十錢
- 一等お座席 御一名—金三圓

一等椅子席は五日前より

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南四七一—番
 專用電話 七四〇八番
 電話南 三七八八番

お草履の準備は御座ぬますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますからなるべく靴、草履でお越しを願ひます。

本誌へカツト廣告掲載の望は向は文樂座編輯部へ希す

あらゆる印刷

永井日英堂印刷所

大阪市西區土佐堀通一丁目
 長三〇八番
 四九四番
 四九四番 } (44) 土佐堀



る飾を「綺に月六の葉青

璃 瑠 淨 形 人 座 樂 文

表 替 時 定 線 ・ 行 月 六

加賀見山舊錦繪

草履打の段より
奥庭の段まで

草履打の段 (午後三時より三時五十五分まで)
廊下の段 (四時より四時二十五分まで)
長局の段 (四時二十五分より五時三十五分まで)
奥庭の段 (五時三十五分より五時五十五分まで)

御休隠幕間

十五分間

艶姿女舞衣

酒屋の段 (六時十分より七時三十五分まで)

幕間

十分間

苧萱桑門築紫轆

守宮酒の段
高野山の段

守宮酒の段 (七時四十五分より九時まで)
高野山の段 (九時より九時三十分まで)

幕間

十分間

彌次郎兵衛
海多歩八
道中膝栗毛

赤坂並木より
古寺まで

(九時四十分より十時四十分まで)



草履打の段

かみやまこぎやうのにしきあ
加賀見山舊錦繪

草履打の段より

奥庭の段まで

腰	腰	善	尾岩	尾岩	
元	元	六	上藤	上藤	口
竹豊	竹豊	竹豊	竹本	竹本	竹鶴
澤澤	澤澤	澤澤	澤澤	澤澤	澤澤
團新	團新	團新	團新	團新	團新
左衛門	左衛門	左衛門	左衛門	左衛門	左衛門
六夫	六夫	六夫	六夫	六夫	六夫

この淨瑠璃は天明二年江戸外記座に上演されたのも最初でこれは享保九年松平周防守の邸に起つた事實によつたものでこれに加賀騷動の世界を借りて来て脚色されたものであります。淨瑠璃となつた内容を申上げますと、入間家の家老蟹江一角は局岩藤及びその弟浮島主殿等と心を合せてお家横領を企てるにつき邪魔になる中老尾上、谷崎主水等の忠臣の自滅を計ります。息女大姫は許嫁義高の菩提を弔ふため落飾して七條の袈裟を賜るその義高がかたみ朝日

の彌陀の尊像の守護を仰せつけられたのは中老尾上であつたが町人の出なれば武藝の心得なく奥勤めなり兼ねるこ局、岩藤はさんぐに罵り恥しめました。尾上の召使お初は主人の大事と身分を忘れて其處に出て岩藤と立會つて之を參らせませす。岩藤は尾上を罪に落さんと朝日の尊像を奪ひその上劍澤彈正と示し合せて尾上の預かる蘭者待の名香を草履の片足とすり替へ置き尾上をさんぐに草履で打擲します。すこゝこ部屋に歸つた尾上は口惜さのあまり、一切を書置して自害して果てます。主人思ひのお初が怪しい鳥啼きに胸騒ぎして歸つて見ればその始末に怨みの草履を持つて直に仕返しに岩藤の部屋へと奥庭に廻れば其處に岩藤は

人形

谷澤求馬 吉田文作

腰元早枝 桐竹紋太郎

腰元お萬 吉田文之助

局 岩藤 桐竹政龜

中老尾上 吉田榮三

驚の善六 吉田玉市

腰元大ぜい

姫君調伏の菊人形の企みをしてゐましたのでお初は岩藤の頭へ草履をのせて恨みの數々述べ遂に双を合せて之を殺害し朝日の尊像を取り戻しました。既に岩藤の一味の悪事が現れお初の忠節は上聞に達して二代目尾上中老に取立てられるのです。

(床本) 草履打の段 (口)

かけまくも大敷立てし宮柱和光のちりも影清きときばかきはの神樂歌千代を壽く鶴ヶ岡弓矢さる身の守りさて足利家の奥女中咲揃ふたる花盡し外珍らしき女郎花さばらば落ん玉あられふるや鈴の音大座の引手に神もなびくらん人ば武士花は櫻木色も香もおさらぬ姿谷澤求馬歸參も叶ふ歸

りさす御家の武運長久を神に一心鳥居前暫し祈み、眺め誠に古歌へえいせし如くお初瀬や雲も嵐もおしなへて花の色香にうつる春哉見事に咲し櫻花、數多ある其中に色も匂ひもあらはれて今を盛りの稚子櫻若君の御武運もやびて開くる花のすいそふハテ心よき眺じやよなき花によれんもなき折ふし斯とはいざやしらにきて織のいとゆう結合姿を夫と見るよ

りもあいたかつたさ走り寄り後は涙にいせせけり、求馬も飛立思ひをばわざとすげのふコレハ初人目も多きかい道の花を咲する早枝殿手折人さこそ多からん我等はいやな東風に吹ちらされぬ其内にドリヤおいさまさふりはなし行人とすするを引留てアコレそりやマア何を聞きはつて無

理言はしやんすも程があるあなたを
 退て仇花を咲す早枝じやござんせぬ
 大勢の傍輩衆やアソ意地悪の岩藤が
 目顔を忍び漸々合ふもまれなるころ
 び臆の其睦言の度々にそなたを退て
 そもやそも外に枕はかほさぬと言は
 しやんした其時の其一言を樂しみに
 つらい勤めも苦にならぬそれにお前
 の疑ひは聞へぬばいな胸懸さほるり
 さこぼす一しづく花もしほるゝげか
 りなり求馬も今更持あましや是は拙
 者が大きな産相コレかんにんしや
 くムゝそんなら疑い暗たかへチ
 暗た共くも日本晴がしたはいのふ
 チ喜しいと寄添ていただき合たるあ
 こより早枝殿くと言ふ聲共に走り
 来る二人は惻り飛退はお萬は夫さや
 きもちのふくれ返つてコレ早枝殿岩

藤様が何やら用があるとおつしやる
 きりく早ふ行しやんせハイく只
 今それへ、後に後に目でしらせ心
 残れど是非もなく宮居をさして急ぎ
 行其間待兼求馬も胸ぐら涙と共にし
 つかこ取りコレ求馬様エ聞へませ
 ぬくくくはいなソリヤ私が様
 なおた福はお氣に入ぬも無理ならね
 ごほんに寝た間もわすられず送りし
 文の數々は山で木の數かやの數千里
 濱邊の砂の數三千世界の星の數はた
 ん畑のけしの數雨のふる程やる文に
 只の一度も返事せず今のしだらは何
 じやいなアわしや腹が立つ、いま
 くしいあほらしいいごんらしい馬鹿
 らしいいやらしい口惜いエ、エ、
 悲しいはいなごききたて、すゝり
 上たる有様は機にさまよふ名古屋ふ

ぐ釣にかゝりし如くなり求馬はおか
 しき押隠し、コレハ思ひもよらぬ疑
 ひ只今はへ参りし所早枝殿が持病の
 しやく見捨むたく印籠の薬をかれに
 あたへしばかりコレそなたの嫌ない
 やらしいイヤうつくしい女子を退て
 よい物かと言つゝお萬が脊中をさん
 こ程よふはめる谷澤が顔打ながめそ
 りやお前ほんまかいなハテ何の嘘を
 言をぞいのふそなたは實此求馬に
 言はれたと言ふが誠かやと問はれてお
 まんは顔に袖、アノマア求馬様の疑ひ
 深い愚な私む花盡し恥しなから聞て
 たべつゝじ水仙、いばら白菊姫百合
 のあやめも殿様にほうれん草と言ふ
 事がうの花けし程も岩連花アノあな
 たの顔よ美人草、其すいかつらにこ
 つほ草、心せきちく氣は紅葉、てり

そふ色の朝顔のひる顔になるまでも
二人しつぼりねむり草夕顔には及ば
れどあなたの前まへの小櫻こざくらをわたしのい
はらで立花たちばなの雪ゆきの下したなるかきつばた
を椿つばきの花はなでそろ／＼さなでしこすれ
ばア、其そのヨイ中なかのかきつばた命いのちはな
しの花はなちりて死人しびな花はなになるさま、ぼ
たんとして紅べにの花はなじやはいな春はるは目
出度でたう子こ持花もちばなうめばわたしば、は、き
いの末すえ日ひ扇あふぎの百々もももも千歳ちとせわしや悦よろこんで
居ゐるはいなほんにおかしい花はな盡つくし、
是これ桐島きりしまにする程ほどにえんさふ花はなを頼たのみ
ます必ずかならずやいのとすがり付涙つみなと鼻はなを
す／＼り上あひはなれがたなく見みへにける
いやもふそれ程ほどまでに思おもふて下くださる
志こころ、さら／＼仇かたには思おもひませぬが

不義ふぎはお家のきついはずさふ、見咎みまが
められては身の難儀なんぎハイ／＼左様さようで
ござります、何を言いふにも街筋かじりも
ふお立たちに間まも有あまい何かの事ことはわた
しが部屋べや必ず待まちて居ゐりますさおのれ
一人ひとりが吞込のみにでいそ／＼とつかばふこ
尻しりを振りまはしてぞ走り行はしく、求馬もとま
は後あとを打眺うながめあのつらで色事いろことさは八
幡宮はつたみやのお聞入きこいれあるまいハ、いらざ
る戯たむしれ餘程よほどの隙入ひまわりざりや御屋敷おやどへさ
打笑うちわらひ館やかたへこそは歸りけり。

(床本) 草履打の段

勇いさましき、かしこき神かみの、神諫かみいさめ
折おりから告つぐるともまわり、いざ御立おたて
さ夕ゆふばえの、中老ちゆうらう尾上おののへ先に立たち、多おほ
くの女中にようぢゆうが取りかこみ、對たいのぼうし
も一様いちように、むれ入いるサギの如ごとくにて

かへりもうしの鳥居前とりゐまへ、イザお局おぼろ
さま御ごいつしよと、云いへど岩藤いはぶち不精ぶせい
不精ぶせい、立ちかへらんとするころへ
きかゝるわしの善六ぜんろくが兩手りゆうてを土つちに、
イヤもうしお局様おぼろさま、最前まへより申まをあ
げようぞ存ぞんじましたれど、あの事ことに
ざりまぎれまして、ハツタリと失念しつねん
仕つかまつりました。エ、他の儀ほかのぎでもござ
いませぬがこの間ま併ひせつけられまし
た、金の儀かねのぎで、ヘイ／＼／＼おうけ
取り下くださいませと、半分はんぶん云いはせず、
コレ／＼善六ぜんろく、この岩藤いはぶちは局役りよく、む
さくるしいもの取りあつこう役やくじや
ない。その金かねは召使めいしのササに手渡てわたし
シヤ、と言葉數ことばかず、云いはぬ色いろなる山吹やまぶき
の包つたえとり出し、ヤモウ、神佛かみほとけよりト
ワトクおもふこの金かねをむさくるしい
もの等なと御手おてにふれられぬと云いふは

アゝまたかくべつな御歴々様、うなるほど金もつても、町人と云ふものは、イヤシイものでござりますさ、云ひつゝ金をふさごころへお屋敷さして急ぎゆく。あと打見やり肩岩藤、何さ尾上ごの、町人に、めづらしいあの善六、町人はいやしいものさモかんしんした、いまの云ひ様、ヤ、コリヤほんにこなさまへはさしあひであつたもの、ホホホオホ、オウわしとした事が、つく／＼と氣の毒なホホホ、イヤ、なに尾上殿へ、こなさまの宿さいふば金持なれど町人偽親しての御奉公、スリヤ今わしがいふた事、氣に障りやしませぬかご味なごころへしかける意地さおもへごわざとソラサマ顔、これは又岩藤様の痛み入ります御あいさつ、何の

私ささようなごことがおつしやるさほり、親共が御出入の縁をちましてかよななおもひ御奉公も、ありがたい身のしあわせ、根が町人の私さごさ、さぞやふつゝかな事計りてございましよこの上さても岩藤様はげかり乍ら、よい様にお指圖たのみあげますと柳ながしのしなやかに、いひまわしたるリハツさま、お、何じやえ、町人の娘御故、いたらぬごさを指圖してくれいかえ、ホンニつべこべ／＼さうまい口ピラじやのう、何のお前の御はつめでわたしが、さしづ受けそうな事かいのう、ついでじやよつていひますか、こなさまの親御さいふはお屋敷の御藏御用をつさめやるさいふ、その用達顔の高慢が鼻の先へぶらついてコレ、この顔

の見えるワイのみねるわいの、イヤまた上のこさいふじやないが、金のイコウはきつものじやこの後さてもその金もち顔やめにして下され、イヤ／＼、お役向は御中老この岩藤は肩役、お、お肩役、おゝもてならば御用人格じやぞや、女一通りは勿論萬一狼藉もの又盜賊なごがしのび入り、サ、その時は役柄じや、女乍らも、御前のおため、討さめる器量かなけりやつさまらぬ、御奉公、シヤガ、定めて長刀の一手も心得がござるうの、お、ソリヤあの誰にけい古なさつたぞイヤ、あの、その御師匠様は何さいひますエ、コレ／＼尾上殿／＼エ、マアこな人ワイノ、人にげつかりものいはせこなたは耳でもつぶれたかご、かみつけら

れて尾上はたゞ赤らむ顔をおしかくし、おはづかしい事乍ら、その心掛はないさいふのか、あの心掛はない、オホー、オウ、みなのも、あゝあれキーヤ、キーヤ、おもひ役をつさめながら心掛はないの、あの心掛はないさいふの、オホー、イヤ、がおれ、そりや、あの何じやぞえ、おゝほんに、これがぬすびとじや、おゝ知行ぬす人じや祿ぬす人じや、何ぞそうではあるまいか、さまくしかけたる雑言を尾上は耐へくても無念の涙たち兼、齒をくひしばりこらえ入る、おゝ何じや、なかしやるか、おゝ口惜しや、町人の娘でも、今では武家の御奉公人、おゝくやしがる、おゝどうりじや、おゝあれみや、

おゝあれみや、かなしそうな、顔アインおほ、ホー、オホー、アハアハアハアハアハアハアハアハアハ、最前もおつしやるには心づかぬ事あらば、御指南たのむさいはしやんすたの、ム、ごれ、おしえてやるご立ちあがり、もつたる扇ふりあぐれば、身をかわして打おさす、手向ひなさば一さうちさふさころ刀ぬきはなせばこれはさおごろく女中連尾上も今はたまり兼ね、共にゆかんご立寄りしが、おもひ廻せば廻す程、大恩うけし、御主人の御先途も見届けす我も身に誤ちあるならば、後にのこりし親達のおなげきは如何ばかりと、懲へるつらき悲しさは胸もはりさく血の涙、身もさくばかりなげきしはそばで見る目もあわれな

り。ムウ、相手にならぬは岩藤むこわいのか、但しは、もの三昧がおそるしいか、おゝおそろしいのか、道理じや、そんなら、もうこりやおさめましょワイノ、ごれ、かへりましょ、ほんにこなさんにかゝつて、おゝこれみやしやんせ、足袋も草履も砂まぶれになつたワイナ、イヤ何尾上殿、何この草履のよごれたのをいふて下さんせぬか、あのわたくしに、あいの、え、イヤかゝじやと申してそれがまあ、何じやそれがまあ、ふいて下されふいて下され、おゝ病もの、こしぬげにはものよごし、ようより、よいわいなこの草履と、わぐより早くおつまつて、尾上が頭テウ、これはさばかり奥女中氣の毒あまり立さわぐさ尾

廊下の段

豊竹呂太夫
鶴澤 叶

人形

腰元	お仲	吉田	兵次
腰元	お冬	桐竹	紋司
腰元	お初	吉田	文五郎
局	岩藤	桐竹	政龜
伯父	彈正	吉田	玉松

上は聲かけ、あゝこれくくくさわ
 ぐまいく女中達、岩藤様がこの尾
 上を御意見のための御てうちやく、
 わしやもうありがさうてく、か
 様の御せつかんさおもうてこの身の
 ふしんくまでありがさうてかたじけ
 ない、ホー、ホー、ホー、イヤも
 し、岩藤様、生みの親も及ばぬ御意
 見、エ、ありがさう存じまする、こ
 の上はすい分と武藝をも心かけて御
 奉公を致しませう、また、この御草
 履は私のために御きようくんこの
 一と品、もうし受けて私の守りと懐
 中したる心根はいわぬ色をやいひ草
 履、胸におさめしりハツサヨさすが
 の岩藤あきれ顔ナンジャその草履わ
 しにもろうて守りにかける、あの守
 りニカ、てもまあ、おそろしいしん
 ぼうな人じやなあ、意見した甲斐が
 ある、以後キツトたしなましやれ、
 サ、い、ゆきませうく、おいさま
 申そうさかへ、草履を後に尾上をば
 ならみ廻して立歸る。尾上は後を打
 みやり、こらえくしたため涙一度に
 ワツト伏しまるび身も浮くばかりに
 なげきしが數多の女中が立寄つてコ
 レく、もうし尾上様、あのにくて
 いな御局の氣質は、常からよく御存
 知、おはら立ば御ごうりなれど、い
 つもの御じやさおぼし召しかならず
 御氣にさえられすさまづく屋敷へ
 お歸りさいサメ立つればなくくも
 か、え引しめ立あがり女心の一筋に
 又おもひ出す口おしなみだ早守々に
 くれの鐘、あすは我が身も消えてゆ
 く、夕告げ鳥のなくも打つれ家形へ

急ぎゆく。

(床本) 廊下の段

星月夜、鎌倉に風誘ふ、扇ヶ谷に棟高き、前の管領足利家の思ひハ千代の方の御館、咲きつゞきたる花の御所、盛りなす見の奥御殿、色香争ふ長局、武家とはいへどなまめかし、世のうきを空吹く風と有頂天、くつたくなしの婢共、一つ所に寄集まり、チーや冬女郎、軒から軒の隣部屋も事多い時は送々しく、今更いふに及ばれども、人目には閑に見え奉公向のせつろしき、チー、お仲のいやろに違ひはない、人一ぱい精出しても部屋下者さいやしまれ能い奉公もすることならぬ、皆めんくの肩づくじや、此春の交代には、出て

のけふと思ふたれど、エーいづこも同じ雞の音色さ、重年をしたのじやわいのう、モゴの白壁も同じこと、縁次第じやささかなご口もはしたの姦しさ、主の噂も鳥影も日脚ものびる八ツ下り、お下りのお迎へさお初がそれさ氣も浮かぬ小腰がめてコレハ皆打寄つてお睦まじい、面白そうなお咄し、新參の私故、其仲間へはゝいるまい、後程お目にさ云捨て、御殿をさして行所を、コレ〳〵お初ごのそなたもちが仲間内マア〳〵爰へさ呼かけられ、いやさもいはれず惚〳〵の、中へすればさしでのお仲、ホンニこなたは仕合せ者じや、結構な旦那をされば勤めながらも骨は惜まぬ、そなたの御主人尾上様の心よし、何から何迄御發

明な御生れ付、道理こそ育てが育てじや、お宿さうは此お屋敷の御金御用一式、親御が勤めるげなの、人は氏より育ちじやと、影口咄しの腰折つて、まけぬお冬がつぼ〳〵口、氣にはかきやんな、お仲が御主人お局の岩藤様、この廣い御殿のうち、唯一人お睦まじい相口さいふがれつからない、これお初ごの、昨日鶴ヶ岡のこと聞いてか、イエわたしは何んにも存じませぬ、そんならマア聞きやお局様と尾上様と御同道で御代參においでなされた時、例のわんさんが出たかして、あらうことかはしたない御用先で悪口たら〳〵まだ其上に大それた、お中老もお勤めなされるこなたの御主人尾上様のおぐしを、主の草履でたゝいたりさの不勤

忍つよい尾上様、御代参なりお上の名代、ちつとこらへて其場は濟んでしまふたげなが、ナント思やる、かけ構ひのないこちとら迄、腹が立つてくく、ヌアハ瘡が差込んで、お夜食もたべなんだぞ。色かゆる松風の評判じやと口々にそしる折から奥の間より走れる顔も心もすぐならぬ、曲りくねつた肩岩膝、あたり見まはし／＼て、ヤイ／＼女共やかましい、そりや何をいふ、次へ行け行かぬかエ、立たぬかと叫り付られ婢共が我部屋／＼へ立つて行コリヤ／＼初我にはちつと用がある爰へこい／＼ハイハテこはい事はないはいのふ。ハイこいさいはマアおじやいのふハイコレそなたは女子供を集めて一はな立て、何で人の噂をいふ

ぞサアなぜ自らか事を悪ふいやつた何ぞ意恨でも有つてか但し又尾上殿が悪ふいへと言ひ付けたかサア最ちつと爰へおじやサごふじやサごふじやいのふと猫で聲も氣味悪くお初は漸く傍へ寄りイヤ私はたつた今さんにまして何も申す間はござりませぬ何も申は致しませぬお赦しなされて下さいませと行かんとするを小腕取モウ／＼それで知れた／＼奥聞ふより口聞げと悪ふぬかさぬものを何赦す事が有アノ悪根性の尾上顔主が主ならおのれまで悪工をなしそふなしびさ女郎めマ佛性なこのわしをよふも／＼ない事迄拵へてなぞ言ひやわつた引さがれめどつらを見いナ／＼ホー、チー、よいつらぢやなアテモマよい器量ぢやなハ、アと傍若無

人に引寄せてつめつた、いつ打擲におろ／＼涙お初が思ひ誤りましたさ出でばこそ只伏沈む斗りなり、お使者の御入エイウぬは仕合せ者め只置くやつではなけれ共能時のお使者故ゆるしてくれるエ立てうせいと怒りの立蹴口惜涙を押隠ししほ／＼として立つて行程も有らせず長廊下のつか／＼と權柄眼出向ふ岩藤互にそれと表向相口馬の會釋はれ／＼チーお使者ぞ有しをどなたかと思へげ彈正様、御苦勞様やと互の目つかひしたり顔に上座に直り其以來は打絶へ申たお使者の趣餘の儀ならず持氏卿御病氣なりと世上へ披露し御賢息お二方の中惣領たる月若殿は千代の方の出世成れば御家督の御内意申入よと後室の御口上かくの通りとの

べにけりム、すりや御家督は月若様
是迄色々心なつくせしは仇事かホ
イテサテ何の案じる事はない肝心か
んもうのコレサ繼目の論旨我等も方
に隠し置けば月若の家督相續思ひも
よらずジテ兼ての首尾はいかゞでこ
ざるサレバ其事大切なアノ密書いつ
ぞや問註所で若落しハット思ふてい
ろくご捜しても見へぬ密書尾上め
が拾ふたことは鏡にかけてにらんで
置いたスリヤ尾上めを其分に濟まし
ては寢覚心がさんご濟まぬきのふ鶴
ヶ岡へ御代参尾上めを同道よい折か
らと思ふた故立つ居つにいちわるウ
トウ喧嘩仕かけても上手遣ふて相手
にならず慮外有ては身の落度ともな
かす程に煮ても焼いても喰はるゝ
様な大体利發な女ではないはいの

詮方飛きて人柄くづしわたしがはい
た草履を持つて尾上めをぶつてく
ぶちすへ手向ひさせふと思ふた所マ
ア聞いて下されヤモ恐ろしいやつめ
夫をも辛抱しくさつて手持ぶきたに
其場を仕廻ふた時に尾上めが婢に初
さいふへや又こいつめに手向ひさせ
夫から尾上めに付込まふと思ふて今
も今逆さんぐにいちめかけたがこ
いつも又辛抱がよいヤモ賢いやつめ
手向ひ所か誤つて斗り居おつて是も
又つばへは行かぬ此方ならば中々あ
いつも遠ざける事は成るまい兼てこ
ちらが工みの様子けごつているアノ
尾上めの思案をかりたい彈正様ム、ハ
テ扱しぶさい女めなみくの謀に
乗せらるゝ女ならずハテごぶおなさ
思案の内襖の影に婢のお初様子窺ひ

ためらふさもしらぬ岩藤せら笑ひ
おゝマ仰山な彈正様此家を一呑にこ
企てるお前やわしがアノ女郎一疋が
何で夫程恐ろしいぞアリヤ堪忍づよ
いのでも有るまい眞實生れ付いた憶
病者又これからは模様をかへあいつ
を追出す其思案はおあんじなされま
すな爰にござりまするゝはいなム
……しからば能きに斗らばれよ、き
やつめ一人ばいまくればチ、後のはの
宮アノ妾づらは心よし、大殿は死ん
で仕廻ふ、若殿の小びつちよ殿には
あてがいぶちを喰はせて置けば此一
家中はお前さわしがコレ壁に耳あり
岩のものいふ世の醫互の胸はナイヤ
ナニ岩藤殿彈正様、吉左右を相待ち
申すご浮べる雲の空頼み奥ご部屋ご
へ時宣式禮別れてこそは入にけり。

長局の段

切

竹豊澤 豊澤 本新 鍛新 太左衛門 夫太夫 六

人形

中老尾上 吉田榮三

召使お初 吉田文五郎

(床本) 長局の段

跡見送りて襖のかけ、お初はそれ
 さ抜き足さし足、あたりを眺め、吐
 息つきテモおそろしい、たくみご
 おさかりのおそい故、ごうか、こう
 かさ、おもひ過ごし、またもの、
 ゆくことならぬ奥御殿、往て見様と
 は思ふたれど、さがめられよか、し
 かられよかご、とつて歸した襖の
 かけ、悪局の岩藤殿と、あの伯父子
 の、だんじよう殿、大それた悪事の
 相談、こりや、大切な事じやワイノ
 尾上様に申上げ、お上への御忠節、
 アイヤ〜く〜しようこも〜たづ、
 大切な事を、なま中に、これを訴へ
 て御主様をさがにおさし、ごの様な
 御難儀をのけるたくみの程もしれぬ

わしが大事の御主と云ふは、尾上様
 より他にはない、そうじやく〜ご一
 筋に、恩義に迫る主おもひ、待つ間
 もさげし長廊下、しづく御殿を尾上
 がおり下り、それと見るよりお〜御
 きげんやう、今お下り、いつ〜よ
 りもおそいお下り、ごうやら、御顔
 もちも、すぐれず御心悪うはござり
 ませぬかあのハットした事かげうご
 いもの云ひ、毎日々々、御前づご
 め、下りの早い事もありようがどう
 けりやおそい事もあるはこの上ま、
 ある事、勝手しらぬそなた故案じる
 は無理ならず、さあごもしや、ご何
 氣なき、言葉にそれと氣も付かず、
 上べをつ〜む、上草履、直す草履も
 きのふの遠恨、おもひなやみて、一
 筋に歩む廊下も心には、羊の歩み、

ひまの駒、神ならぬ身のそれぞとも
知らぬお初がもの、じいゝ間も遠き
長屑部屋の戸明けて入りも、常に
かわりし舞色を、ささられまじし
やくにまぎらし正直は、さつきにか
ら持病の癪がおこつたわいの夕飯も
食へたふない、いつもの通りさすつ
てたも、はいと、お初がさし寄つて先
づお枕を遊ばしませ、お風召すなご
かひまきを、かひんしくも立廻り
お癪のおこるも御道理じやそれにつ
けても軽いものは、奉公とてもきさ
んに、一那樣やら御家來やらお友
達見るように、御心やすうなさつて
下さりや、病氣もごさいませぬ、オ
ウ、言やる通り、上々方の宮仕えは
いかふ心氣をつかふもの、そなたの
父も武士と聞いたが、世も世なら

どの様な御奉公も仕やる筈を、町人
の娘のわしが、つかふと云ふは、さ
ぞや、心ゆくもおもやらふが、さ
かくに人ば、時節をまち、花咲く春
を待つのがかんじん、もつたいない
こも、御意あそばすな、何ごとも大
旦那の御話に御存知ならん、私親子
が受けし御恩は、口にも筆にも盡さ
れませぬ、せめてもの、御恩報じ無
調法な私が御そばでどうぞ御奉公と
御れがひ申し、此の春から、初奉公の
御面倒、ありがさう存じます。その
大切な御前様が御病身なを御案じ申
しそで御わづらひ、出入様にぞ存
じまするが、年はもゆかめ私が口か
らませた事を云ふ、小しやくものさ
おしかりもあるうけれど、さかくに
人は氣を晴らしものに屈たくさえ致

されば、わすらひは出ぬものじやと
巧しやな御醫者の申されましたがそ
の御養生にはもの見遊山、あの御前
様も、しばぬはお好きでござりませ
うな、おゝなるほど芝居は好きじや
が、そなたも、定めて好きじやある
うのいやもう、好きの段ではござり
ませぬ、そう申すうち歌舞伎より、
あやつり芝居の淨瑠璃が私は面白う
ございますおゝそんなれば、ばなし
が合ふわしもきつうじよるりが好き
而し、たまゝの宿下りより、他はじ
よるり本で樂しむばかり、わたしも
お屋敷へ上りません、その前はよう
見物に参りましたが、あたりじよる
りも多い中に、あの忠臣蔵のじよる
り程おもしろいのはござりませぬ
ぞえおゝあの師直面のにくさゝい

やもうく、お前様の御心にく、壺谷殿の師直へ軀りかけられしそのころに尤もな事におぼし召しますか但しました、不了見なごにおぼしめすか、何とおぼしめします、サレバのおたんりよはあつたれご意恨に意恨を重ねる上は御もつともかはあろうかいの、いえくくばかり乍らそりや、お前様の御ひいき口、えんや殿は大不了見、何故さ御意遊ばせ、大切な身を軽々しく短氣にその身をほろばし給ひ、親ごさまの御なげき、イヤ、ほんに私さした事が、粗相な、壺谷殿の親御はないもせぬもの、何さおぼしめす家國をほろぼし、奥様はじめ御家内散りく、たつた一人の不了見が千萬人の身にかゝつて御恩を受けたものごものなげ

き程は如何ばかりぞおぼしめすぞおなさない、オウ、あほらしい何のこつちや、ひょう子にのつてお前様へ、御意見のやうに、お、おかし、ごりやおくすりを見てこうさ、何か言葉に、綾の糸、勝手へコソハ立つてゆく、後に尾上は胸せまり、しのびの涙ふちもせも、あずばなき名を白紙に、硯の海のそこはかき、なきなか文も後やさき、書きなく筆の命毛も露さ消えゆてはかなさを、たえ入るばかりしりのびなき、涙さにも、かきさめめ桑の文箱も浦しまが明けてくやしき遺恨の草履、文もろさにも文ばこのひも、引しめ、こかたえなる、手箱のうちを片見別け、敷も涙の玉くしげ、こまくしくも古文庫におもひつめたる浮き涙、つ

むにあまる小風呂敷、中ゆひしめて玉の緒も今を限りの空結びに、封もしごろにかきくれておもはずアツトなき聲も、それにつくみしおもひなり、何心なく勝手にお初は心イヤセキさ、せんじあげたる薬なべ片手に茶わんたづさえ出でサアお薬ささし出だし見れば包ま文箱にキツト目をつけこれはしたり、御心悪いにごこえの御文、御氣がつき様に何ごさ、問ひかけられて左にあらぬてイヤ、この文はかゝ様へ急にあげればならぬ文、この包大儀ながら、つい往てきてたもさものがるに、云ひつけられてもじくさ、どうやらすまぬ今日のしたら、不精くにあの参れなら参りませうがアレころうじませ空合ひも曇つてくる、勝手がま

しゆうおぼしめしませうが明日の事
になされませぬか、ても初とした事
が、如何に心安だてて主のいひつ
くる宿への使、明日の事にでもせい
さは、如何の主なればさて、主の云
ひつけを、そむきやるか、イエ〜
〜何の御意をそむきませうぞ御持
病の御意もおこり、お顔もちも悪い
故、イヤ、ヤクキばもうなほつた
日のたけぬうち早ようゆきや、ハイ
はようゆきや、何をうち〜するぞ
いの、ゆけと云はゆかぬか、ハイ
只今参りますツイの、文箱さりあげ
次の間の案じに胸もぱりつら明け
て出したる生木綿の、さほしよぞべ
なる紋附の、部屋形もの、一てうら
帯しなほして一人言、今日に限りこ
の御使ひ、ゆきさもなうて〜尾

上様への御身の上が案じられてどう
もならぬきのふ鶴ヶ岡の喧嘩の様に
御殿一両様の取沙汰を、御存知ない
か、わしにまで御かくしなさる御心
の程が、ワシわどうも案じらるゝ、眞
實底から大切におもふ御主の大事を
蟲が知らすぞ云ふのか、あゝ心もこ
ない〜、御告げぬに違ふても、い
たふりしてゆくまいか、イヤ〜
〜どう云ふ急な御用やらしれぬ事
をそうもなるまい、オウ、こう云ふ
時の佛神様、ソウジャ〜さちりて
ふづ、一心先状の手を合せ、なむか
ん音様、なむきし母神様、御宿へ参
つて歸りますうち、主人の身の上た
のみあげます、ざりや、一はしり急
いでこう小褌りしく立からげ、錠
口さして出で、ゆく、蔭見ゆるまで

見送りてこらえ〜し胸の内おもは
すワツト伏し〜すみ、消え入るばか
りなげきしがよう〜に顔をあげ、
まだきのふ今日のなじみのないこの
わしを大切に、大恩うけた、主人じ
やと、年ばもゆかぬ心から、大事に
おもふてくれる心さし、コリヤ、か
たじけないぞよ、うれしいぞヨ岩藤
へ遺恨を察しサツキにもよき事に、
じよるりのたこえを引きわしが短氣
な氣も出やうかと、云ひまわしたる
健氣なり、ハツ今別れたが一生の別
れさばしらすして、サツヤさつかわ
もどつてきて、なげかん事の不びん
やと、身も浮くばかりせき上げて、
前後不覺になげきしが、やゝあつて
顔をあげ、父様や母様の此の年月の
御不びんぞ、御恩は海も尙淺く山よ

りもふかき御恵み、片時忘れぬ御二人さま、この中の御文にも母様のこまなく、いこうこの頃はおしなべて引かげのはやり病、一入あんどらるゝ程に、この守りにはぎ寺のやく病よけの御守りじや傍輩衆も多い事悪い病の折見舞、うつらぬ程に大事にかけや、またその上にも用心と云ふて他にはない食へものに氣をつけて氣鬱せぬ様に折ふしは、酒でも食べて氣を暗らし、わすらわぬやう、第二に御奉公を大切に、また合ひ薬の黒丸子切れた時分と氣をつけても三年で御年もあく、御禮奉公はようして下りやるを指おりに待つてあると小さい子ごもか何そのやうに、成人の此のわしを大事がつてござるその中へ、あの文を御ろうじたら何

ご身も世もあられよぞ、常に氣細な母様の、その塲ですぐに死なしやんしよ、今死ぬるよりこの身より、後のなげきをみる様で胸もほりさく悲しさは何の因果のむくひにて、親子のゑんの淡すみに書きおく筆のさかさまごさかならずおゆるし遊ばせご正体涙せぐりあげ、身もくるふばかりざり亂す、あゝ我乍らみれんなり女乍らも武家奉公、草履をもつて面をうたれ、何面目に、ながらえて人に顔が合はされ様、人はおもえども大切な御前様への忠義をおもひ、今までは長らへしむこの書おきに委細のわけ、伯父彈正の悪事の密書命を捨て、上への忠臣、たゞ何事も宿世の約束、最期晴れの仕度して、一遍の經陀羅尼、唱へんものさ一間なる

伊間へさして日も西へ夕日まばゆき空色も磨き立てたる練べい造り足利家の裏門口、文箱かへ出るお初、形ふり見ずにいきせきさゆく、向ふより二人連れ、何のブツカ汚し合ひ、くるもお初が心の辻占、ゆき違ひさま、かなわぬくも叶はぬさつかへすがまだしもの事、可愛い事をしましたと、きく辻占にお初むハツト、見やる空には一群の止まりむらすの鳴きつれて、最期を告ぐるたまよばい、心細さも身にしみて歩みもやらず立ちごまりあゝ氣にかゝるく、辻占の今のはなし、鳥なきのこの悪さ、あれくけしからぬ胸さわぎは、こりやお宿へはゆかれぬワの御様子、知れるこの文箱封じを切つて見てのけようさ、おもひ切

つて封おし切り、見れば包みし草履かたぐ文ざりあげておし開き、何じやかきおきの事、こりやかなはぬさふさころへ、一字もよますいつさん、御門のうちへご入合ひの鐘も無上を告げてゆくころんづおきつろうにんぐち半狂亂のお初が仰天、部屋やまの襖も案内なく一間を見ればコホいかに、血に染つたる尾上がなきがら、だき上げてたゞうろくえい死なしたりおそかつた、今一足早くばあゝこの御最期はさせませぬこれもうし尾上様、尾上様、旦那様と呼べご答へも涙より他に言ばもなきしすむ、笛のクサビをおもひのまゝかきゝつてござるものを何ぞ答へがあるものぞ、何御前様、御披露、ウワンこりやさつきにうかひきいた岩藤

が密書、これさえあれば御身の明りは立つ、ありがたい、ありがたい、これ、もうし、御無念の魂はまだ家の棟においでなさりようえいきこえませぬワイのキコエマセヌワイの昨日鶴ヶ岡で岩藤面に草履をもつておうたれなさりしその所沙汰は屋敷一つばい、御家來の私が身におしゆうあるまいか、ヤ、無念にはあるまいかいの、女にこそ生れたれ、私も武士の娘、御鬱憤を晴らし兼ようか、ゆうべ一さ夜まんじりもせず今日とても思ひざり、もううちあけてお話しなさるか、今うち明けておはなしかと、身合わして見ても御かくしなさるゝ、エ、不甲ひないお生れじやこそばで見る目はがゆくてサツキにも淨瑠璃の例を引き御

心を引いて見れば壺谷判官の短氣なのも無理さはおもはぬ尤じやとおひやつた時のそのうれしき、御心に張りがあればあつばれお手はおろさせぬさよるこびはよるこびしがヒヨット御前様が淨瑠璃の壺谷判官となされてはと、わざと御前をおなだめ申しおきを見合せ岩藤を一さ刀に刺し通し、御恩を報じたてまつらんさおもふに甲斐もこよひのありさまおきおきの此の表、おはつば仇岩藤が首引つけて御無念を晴らさせませよう、必ずおまち遊ばせと油根の草履手にさりあげて打眺めく無念の涙血をそゝきこりかたまりし烈女の一念、義女のその名を末の世に錦さかわる麻の衣、女鏡さ知られけり世も早初夜を告げてゆく御夜詰ぶれ

奥庭の段

岩 藤 (竹本むら太夫)

お 初 豊竹竹太夫

忍 び (竹本さの太夫)

安田庄司 竹本陸路太夫

鶴澤友 平

野澤吉 左

人形

召使お初 吉田文五郎

忍 び 當馬 吉田玉徳

局 岩 藤 桐竹政龜

安田庄司 桐竹門造

腰 元 大 ぜ い

の音冴えて鐵暗燈の光り冴え長局、胸までおろし手を組んでおもひつめたるその眼色、氣も張り弓の三ヶ月も、入るさのかげのくらまぎれ手水鉢にさしよつて、柄杓もつ手もワナくくさすくひあげたる水一口、うらみの草履片手には血潮したる尾上が懐劍片手片足の早れたば、庭の干草に鳴きつぐる蛙の聲ものすこしあたり見まわし奥の間へ、奥一文字に。

(床本) 奥庭の段

かけりゆく、忍びいりたる奥御殿折ふし人もさだえたるげ天のあたえさ尙おく深く、うかひ折柄何心なく岩藤が出合ひ頭を最屈強、待ちもうけたる九寸五分中老尾上お召しつ

かひ主人の遺恨、覺えあらんさいつかくる、此方もしれもの、身をかわし、ヤア、推擧なるげす女、ひしいでくれんさ打かけぬぎすて、お初がきうでむつす取り、組ふせんさ金剛力、押せごもつけごもひるますさらす一心こつたる主の仇、かよわき力にふりほごき、つけ入りくゝゝごみ合ふれん力通すうらみの又、うけさり給へさ名のりかけ、つかも折れよこつき通され、さすがの岩藤七轉八倒報ひは早き斷末覺、心地よくこそ見えにけり、もの音きつけ女中方、なぎなた手に手におつさりまく、さびしさつてまつたゝ遺趣は一人お上へ手むかひ致さぬさ云へどもゆるさぬ席のこの前後をたてきる劍の林トカでのひなに群鳥のにがせ

はせじと争ふところに、奥用人安田
庄司静まれく御詮意ありと聲にひ
かゆる女中方お初は臆せず、懐中よ
り一通を取り出し、主人尾上心をこ
めしこの密書御披露とさし出す源造
取りあげ逐一によりおわり、ハイ、
お初とやら出かしたり、その場を去
らす主の仇うちこめしは武士もおよ
ばぬ大忠臣、殊更大切なるこの密書
御上への忠節感するあまり、今より
取り立て、中老役、その名もすぐに
二代目の尾上、血潮にふれしその衣
服、早新めて御前へ出仕、仰にお初
は有難涙歩むもゆくも夢の夢、主は
消ゆれど名は朽ぬ忠臣義女の道廣く
館を離れ出で、ゆく。



艶容女舞衣

酒屋の段

酒屋の段

中 竹本南部太夫
切 野澤吉彌
野澤吉兵衛
野澤市松

人形

丁稚長太 吉田榮三郎
半兵衛女房 吉田玉七
美濃屋三勝 吉田光之助
茜屋半兵衛 吉田玉松
五人組 佐兵衛 吉田玉市
親 宗岸 吉田玉次郎
嫁 おその 吉田文五郎
娘 おつう 吉田文枝
茜屋半七 吉田玉幸

今ころは半七さんのさばりて知られてある世話物の粹であります。上中下三巻からなつてゐますが酒屋は下の巻の上摺町の段の切になつてゐます。書下しは安永元年十二月の豊竹座で、竹本三郎兵衛、豊竹應律、八民平七の合作です。この作の以前に實永年間に同じ豊竹座で『笠屋三勝廿五回忌』と名題して上場されてゐます。この段の内容を申上げますと茜屋といふ酒屋の半七がお園といふ女房が有るのにもかゝはらず昔馴染の美濃屋の三勝といふ藝子に迷ひ遂に人殺しまでする。お園の父宗岸

は舞の放蕩を怒つて一度娘を連れ戻したが再び考へるころがあつて茜屋へ復歸させやうとする。半七の親の半兵衛も拒む處から事件が展開されて、お園の貞節や、捨兒のお通の守袋から現はれた遺書で一家が悲嘆するといふ人情の機微を穿つた場面がそれからそれへさ續く名作であります。

(床本) 酒屋の段 (中)

古郷は大和五條に名のみして今は浪花の上摺町、格子造りも小つくり三輪の山本ならぬ共杉立軒の酒林、味淋、白酒樽酌の看板もからい渡世なり賣場に居眠る丁稚の長太酒壺であたまコツツリアイター、エーどいつじやい人のあたまをたゞきをつ

たはどいつじやどいつアたれもいたのじやなかつた、おれがでに打たのじやエヘー、ヨウ何じや〜又弾は〜隣の須賀市も稽古じやそふな何ぞ面白い事をうたへばよいがなM かほいらしい前髪をあいそもこつそり坊様にせう事もなきうきふしのこゝばつかりに日はてるまいし、ハア萬年草をやらかしおるコリヤ面白くよふ〜味い事〜どふぞ長ふ頼みまずぞへこ体を横に寝はらばい餘心たはいも納戸より立出る此家の女房ヤイ長太よ其なりは何じや、今日は親父殿を代官所からお召で何事か起つた事と内でさやかか案じて居るに其氣も付かぬたわけ者エーたしなみなれと叫られて俄にしよげりましくしよ水ばなすゝるばかりなり、

早や日も西に片影を歩む姿は一風有二つか三つの子を抱き酒やのれん押明ておじやまながら酒を少々下さりませと内へは入れれば何じや酒くれへ〜んこちの内にやる酒はないは通りや〜、イヤ、私は物もらひでは御座んせぬ、よい酒が一升買たう御座んすと言に女房立寄てエー又しても阿呆奴が産相ばつかりぬかしおるお救しなされて下さりませ、そしてよい酒さおつしやるは名酒でもあげませふか、アイ遣ひ物に致しますのじや程に随分よいの内方の繪櫛に一升入て下さりませテ、お遣ひ物になさるなら相生がよからふと、ほこりを拂ふ塗櫛に七具さし込み小きんの呑よい程らいに詰櫛の口にべつた

り銘酒の書付手早に張て差出せばテ、相生さば芽出度銘酒價はそこへ宜しふと、おあし取出し差出し、近頃わりなき事ながら内方のお衆に此櫛持せて、一寸そこ迄やさわかして下さりませぬか、チーそれは何よりお安い事コリヤ〜長太よ此女中様に付て居て櫛の明た時取りに行く様に先様をよふ覺えて戻らふぞや、ごこ迄なりと連くお出でなされませテ、それはマア〜お嬉しや、お禮は戻りに申ませふ、こなさんいかい太儀ぢやの、と挨拶さり〜ぬり櫛を長太に持せて出て行く引連て主半氏衛老の五調氣はいくらから急ぐ足元我家の軒跡に年寄五人組打連伴ひ立歸ればチー親父殿戻らしやつたか、チーコ

レハ〜お年寄様ごなたも〜いか
 い御苦勞思ひがけない代官所のお召
 故何事か起つたか今朝からわしは
 案じつゞけ氣違な事じやござらぬか
 アイヤ〜お内儀さして氣違な事
 じやござらぬ高がこゝの半七が山の
 口で人殺した、アイヤ〜申お宿
 老様半七が人殺し、ム、サア、忤め
 が一頃とは違ふて、モ、ぞけ出した
 故の勘當ムサ、其挨拶は、忝いけ
 れど先其ルになされて、ナア、何も
 仰有て下さりませぬ、ヤコレ、女房
 共定めて案じて居やつたであるが何
 も氣違な事じやなかつたが皆様は無
 御退屈御酒でも爛して上ましやご夫
 が詞に悦ぶ女房それはマア〜目出
 度い事身に覺はなけれ共、時の災難

でどんな事が起ふか案じた程は悦
 ばぬ皆様の草臥休め着はなくと御酒
 一つと立を留めてアイコレお内儀イ
 ヤモよしにさつしやれ。下宿で支度
 して酒もたんご呑んで居れどトツト
 モ理に入つたかして酔も出ぬア、氣
 の毒な事では有と宿老の投首、何と
 やら様子有げの折柄に上の町からお
 い〜と泣て戻る阿呆の長太片手に
 酒樽片手に抱く稚子も俱に泣く我家
 の内エ、又阿呆めが餘所の子にせぶ
 らかされたナ、エ、よい年をして何
 のほへざまたしなみおれと叱られて
 イ、エこちやせぶらかされやせぬけ
 れどなきつきの女がおれの辨天様の
 中へつれて往てちよつとそれ所まで往
 てくる程に此子をちつとの間抱て居

てくれと言ふてナそしてから、何處
 へいたやら、何ぼ待ても戻らぬによ
 つてナ金比羅様や八幡様や生玉の中
 をあつちへいたり、こつちへいたり
 尋ねる中に此子が泣によつて、それ
 でおれも悲しいワア、〜ヤイ〜
 何をぬかすやら、それはおのれが阿
 呆じやによつてやつぱり辨天の中に
 待て居ればよい事をエ、定めしこゝ
 へ尋ねて見へるであるぞ、泣子をす
 かし抱取り、〜よい子じや姫御前の
 子じやそふなと長太が提し樽打なが
 めハア替つた書付コレ見やしやれ、
 親父殿さ樽さし寄ればハテ此廣い大
 阪同じ名もあらいでばと言ひつゝ立
 寄肩には、ム、進上、上總町馬場
 先にて茜屋半兵衛馬場先で茜屋半兵

衛さいふはこちの事じや、見りやこちの塗櫓コリヤ様子でも有事かサイノ様子と言はさつきに見知らぬ女中が酒買ひに来てアノ長太を雇ふて連れていかれたが其櫓に此書付ヤア何じや見知らぬ女中が酒買ひに来てサイノ、其時何の譯も言すアノ阿呆を雇ふて、ム、ハテ、めんよふな、さふしぎに立寄五人組こらむお宿老の分地地と、言ふても詰る塗櫓の禿たあたまをかたむけり、半兵衛膝を丁さ打ち、ム、よめた、コリヤ捨子じやはい、ヤア捨子とは何を證據ハテこちの内て買ふた酒に進上、茜屋半兵衛様と書付其子を阿呆に抱して何處やら行方の知ぬは疑もない捨子此半兵衛を見込養育帳む印の此酒

何さそふじや有まいか、ム、成程く言はつしやればそんな物、何のよしみもない人が酒くれふ筈がない是が捨子なら何さまあ利口な仕様じやござりませぬか、ソレイノみかん籠もいらす、イヤモ新らしい捨子の趣向、ヤコイツワ一番はやりませふはいの、シタがコリヤ捨子のつゝもたせじやないかや、ハテ何ぞ致しませふ、こふ突附られた事じやもの養ふてやらざなりませまい、おゝそれはいかい後生じやが其かわり其子について違論妨ある時は何時でも町が證人じや、サ、何ぞ皆の衆、是をはねにモウいのふじや有まいか、イカニモ左様と立上れば半兵衛夫婦つゞに今日の御苦勞御世話の禮、

何やら物を言たげにふり向宿老を目でさめ稚子いだしおちうげは一間へ。
(床本) 運屋の段 (切)
M こそは入村の、鐘に散り行く花よりも、あたら盛を獨躑の、お園を連れて爺親が、世間構はぬ十徳に、圓い天窓の光りさへ、子故に暗む黄昏時、士の妻は灯をさもし、表を急々、中合頭に。詞、ホ、是はく宗岸様、其處に居やるはお園じやないか。アノ母様、お替りもござりませぬか、言ふ挨拶も何處やらに、疵持つ足の踏途さへ、低き敷居も越兼ねる。宗岸は遠慮なく、詞、半兵衛殿お宿にかこ、娘を連れて打通れば妻

は門の戸引立て、サア〜先づお上り成されませと、奥底も無き詞の中夫と聞くより牛兵衛が、一間を出る澁々顔。詞娘を連れて行かれたからは此方の内に用は無い筈、何の爲にござつた事と、針持つ詞に妻は氣の毒詞イヤもふ人様に追従云はぬ偏屈な我夫、必ずお氣に障られて下さいますな、此間は嫁女の婦つて居られまして、いかいお世詞でござりませふナンノ〜、牛兵衛殿の立腹は皆尤も、三勝とやらに心奪はれ、夜泊りして女房を嫌ふ半七、所詮末の詰らぬ事と、無理に引立行つたのは、娘に引を取らずまい爲儻が氣迷ひ、夫から思案爲るに付け、唐も倭も一旦嫁に遣つた娘、嫌はれふが如何爲ふ

が、男の方から追出すまで、取戻す云ふ理屈は無い筈、コリヤ宗岸が一生の仕損ひ、と悔んでも跡の祭り園めも晝夜泣き悲しみ、朝夕も勸まれば、若や病が起らふかと、見て居る親の心は闇、儂も天満に年古ふ住んであれば、人に理屈も云ふ者なれど、誤りは詫れげ成らぬと、年寄の顔押拭ふて來ました。何彼のことは了簡して、今までの通り嫁じやと思ふて下され、これ頼みます御夫婦と謝り入つたる挨拶に、お園もうぢうち、手を支へ。爺様の一徹で、無理に連れられ歸りしが、一旦殿御と極まつた半七様に嫌はれるは皆私か不調法、鈍に生れた此身の料、詞今から随分お氣に入る様に致しませう程に

猶且元の嫁娘と、仰しやつて下さりませ。お二人様と、跡は詞も涙なり詞オ、何のマア、其方さへ其心なら此方は變らぬ嫁姑ノウ親仁殿、そうちや無いか。イヤそうぢやない。昔唐に例が有る。太公望とやらいふ人の妻、夫に隠取り月日を経て、訖言に來りし時、鉢の水を大地に覆させ、其水を鉢へ入よ、元の如く夫婦にならんさ、太公望が云はれたと、且外講釋で聞いて來た、夫と丁度同じ事、此方の方が無理隠取つて、今更嫁と思へとは、何時まで云つても返らぬ事、口詞叩かすと、早う連て退しやれ〜と、膠もしやく〜りも、戸口、顔も背けてゐたりける。詞オ其腹立は尤も〜、が重々不調

法は、此天窓に免じ了簡して、何卒嫁に。否でござる、忤めも勘當したれば、嫁云ふべき者もない筈。サア夫も懲しめの爲常座の勘當。イヤ常座でない、七生までの勘當ぢや。ム、其又七生まで勘當した半七が代りに、此方は何で繩に掛つた。ヤアサア半七は親でも子でも無い此方が、今日代官所で何の爲に、縛られて戻らしやつたさ、思ひも寄らぬ宗岸が、詞に悔り驚く、女房、嫁も俱々立寄つて、肌押脱せば半兵衛が、小手を緩めし羽搔締。ノウ情無や何事さ、嫁はうろく、女房も取付き歎けば宗岸も。詞イヤ未だ驚くことある、舞の半七は人殺し、お尋ね者になつたわいのさ、聞くより二人は又悔り。夫は何故如何した譚、様

子を聞かしてコレ、半兵衛殿と問へども更に返答は差俯いて詞なし。宗岸涙の目をしげたまき、詞一昨日の晚山の口で、善右衛門を殺したは昔屋の半七さ、噂を聞いた時は、驚くまいか悔りせまいか、膝も腰も抜果して、思へば不孝者、能い時勘當さしやつて、親に難儀の掛らぬは、未だ此上の仕合と思ふたは他人の了簡、違ふた此方の縛り繩、科極まつた半七が命、一日なりと延したいさ人殺しの科を身に引き受、繩掛つた此方の心は、眞實心に子を思ふ親の誠さ知れば知る程、宗岸が仕損ひ、半七の身の難儀、此方も勘當して仕舞ひ、儂も娘を取戻したら、親にかゝる首繩も無い、能い事爲たせ世間から譽める人も有らうが、親と成り

舅と成るが、大抵深い縁かいのう。斯う云ふ時宜に成つた時は、譽めらるゝよりは笑はるゝが親の慈悲、片時も早うと連れてきた心はの、一旦嫁に遣したれば、半七が厭がるならハテ尼にしてな此内で、御夫婦の亡き後の、香花なりとも取らして下され、コレ手を合して頼みます。訛言が叶はれば、引放されたさ突き詰つて、短慮な心も出し居るかさ、案じ過して夜の目も合す、母親は無し唯一人、彼女を思ふ儂が因果、此方の繩目も半七が、科人に成つたら猶可愛かる、譬へ又勘當も定ても又離切つたが誠でも、眞實親子の肉縁は、切るに切られぬ血筋の親、儂も此方程は無ければ娘は可愛い、まして勘當はせぬ娘、愚痴なこ人が笑はふ

が儻や可愛い不便でござる。これこれ聞入れて給へ半兵衛殿と、是まで泣かぬ宗岸が、堪へにこたへし溜々を、たくし掛たる叫び泣き、我強う生れし半兵衛も、舅の心根思ひ遣りオ、道理じやく宗岸殿。と、跡はないちやくり、妻もお園も一時に、四人が涙洪水に、樋の口開けし如くなり。半兵衛涙の内よりもお園が顔を打守り、何から何まで氣を付けて孝行にして給る。斯な嫁が尋れたとて、最一人と有る物じや無い、世間の人の嫁鑑、半七が事は思はぬが、其方に別る、半兵衛は、能々不仕合せ、退せさむ無い、返しとむ無い、さば思へども、此方に置けば此儘若後家、儻は夫が可愛い。いさしうおぢやる。夫で訛言聞入ぬ、了簡して

呼戻さぬ。これ嫁女、必ず酷いご恨んでばし給んなや。一人の悴はお尋ね者、翌日より誰を力にせうぞ。孝行にして給はつたが、今では結句恨めしいと、せき上げせき入る舅の脊擦るお園も正体なく、伏沈むこそ道理なり。半兵衛漸々顔を上げ、云はればならぬ事も有れど、孝行な嫁女の手前、胸に穿つて言ひ悪い、宗岸殿奥の間で言ひ明さん。これお園、其方を更々嫌ふぢやない、氣に掛けて給るなや、舅殿へ話す中、暫く爰にと三人は悄悄と奥へ泣に行く心の中ぞ哀れなる。跡には園が憂思ひ、かゝれさてしも烏羽玉の、世の味氣無き身一つに、結ばれ解け片絲の、繰返したる獨言、詞今頃は半七様、何處に如何してござらうぞ、今更返ら

ぬ事なむら、私言ふ者無いならば半兵衛さんもお通に免じ、ごまで成したる三勝殿を、疾にも呼入れさしやんしたら、半七様の身持も直り、御勤當も有るまいに、思へば、此園が、去年の秋の煩ひに、寧ろ死んで終ふたら、斯うした難儀は出来まいもの、お氣に入らぬぞ知りなむら未練な私が輪廻故、添臥は適はずとも、お側に居度いさ辛抱して是まで居たのをお身の仇。今の思ひに比ぶれば、一年前に此園が、死る心が付かなんだ。堪へて給へ半七様、私や此様に思ふてあると、恨みつらみは露程も、夫を思ふ眞實心、猶彌や増す憂思ひ。詞翌日はさうから父様に又連れられて天満へ往に、半七様の不圖した果敢ない便りを聞くならば、

思ひ死に死ぬて有る、逆も浮世は立ぬ覺悟嫌はれても夫の内、此家で死ねば後の世の若しや契りの綱にもと果期を急ぐ心根は、餘所の見の目もいぢらし。斯る哀れも知らぬ子の合泣く聲に目や覺ましけん、一間を出て、乳飲まう、乳が飲み度いおげくく、お園が膝に寄添ふ子の顔見て惻り抱き寄せ、詞ヤア其方は美濃屋のお通じや無いが、爰へは如何して在つたか、不審ながらも抱上ぐれば、半兵衛宗岸母親も一間の内を轉び出、詞オ、これく嫁女忝ない其の、障子の中で聞く度に、拜んでばかりゐたはいの。禮云う事も澤山あれと心の急くは此子の事、美濃屋のお通と云はしやつたは、半七と一勝の。アイお二人の中に出来た

お通と云ふは此子じやわいな。ヤアく親父殿聞かしやつたかオ、聞いて居る、其又お世を、ナ、何で捨子にして下此地へ越した是や理由が有らう、娘懐か何所ぞに、書いた物でな無いが、早う尋ねて見やと言ふ内に、わくせきあくる守袋、内よりはらりさ落たる一通取る間運しと封押し切、詞ヤア何ぢや、書置の事と書いて有る。ヤアくこれく嫁女其方の好い目でちやつと讀やく。アイく、ナニナ二十度契りて親子と成る、父の恩は山よりも高きこの世の教、我身に辨へ居候へども、其御恩も得送らす、儘ならぬ義理に擲まれて、心にも有らぬ不孝の罪お赦し下され度候、別て母様の御養育、申しお前の事でござりま

す、能ふお聞き成されませいオ、能ふ聞いておますわいの、唄、聞いてゐるさの障子より、洩れ出る月は呀れど胸の闇、合詞エ、時も時と隣の稽古、然して其跡は、何と書いて有るぞ、アイ母様の御養育海よりも深き御恵み、親父様御機嫌悪い時には、陰になり陽になり、幾千萬のお心遣ひも、泡と消行く我難儀、人を殺せし身と成り候へば、思ひ設けぬ御別れ、詞ア、夫なら矢張半七様はオイノウ嫁女、善右衛門を殺しましたわいのふ、ハア彼善右衛門と云ふ奴が、大抵や大概、悪い奴ぢや無いわいの、彼んな悪者でも喧嘩兩成敗我子の命を解死人に取らるゝ、思へば思へ宗岸殿、口惜いわいのく、無念にござるさ述懐涙見聞くお園は

以前の剃刀、南無阿彌陀佛と覺悟の體、是は驚く、母、宗岸叶はぬ手にも半兵衛は、漸々押へて、これ嫁女、詞老寄りかりを跡に置き、死なうとは胸怒ぢやはいく。エ、これが死なずにゐられませうか、放して殺して下さい。オ、娘、尤もぢやい、わい、ア老少不定の世の中さ、聞流したも今身の上、みづくとした若い者、義理に迫つて死ぬるさ。ノウ半兵衛殿宗岸殿。思ひ廻せば廻す程チエ、口惜いわいのく唄 驚鷲の片羽のさばく、子に迷ひ行く小夜千鳥、無残や半七は今宵限りの命ぞ、三勝件ひしほしほさ心に掛る我子の顔、名残にせめて今一目さ、俱に戸口に夜の鶴、内には夫と白髪の母、心ならねど書置

を又取上て讀む文章。詞人を殺し一日も、生長らへる所存はなく候へども、お通さ申す娘一人ごさ候て、殊にかよはき性質、不便さ餘る親心、夫に心引かされて、今日まで長へ候へども所詮助からぬ身に候へば思召も省みずお通を遣はし候ま、私の小さく成しと思召され詞づれく婆見しやいのくエ、私の小さく成しと思召され御養育のお世話の程くれく頼み上候。子を持つて知る親の恩さ、お通が不便さいぢらしさにお二人様の御恩の程、猶更此身に浸み應へ有難存奉候、又々心掛は親父殿の御勘當相果候後にも、お赦し下され候様、母様直敷お執成、是のみ黄泉の障に御座候々々々、オ道理ぢや道理ぢやい可愛や

泣聲洩る、表には、半七が身に應へ斯る嘆きも我故さ、思は、今更空恐ろしく身を悔んだる男泣、袖や袂を啗締々々、泣く音止むる憂き思ひ此方はお圍が猶涙、泣、取上ぐる書置の、讀むも果敢なき世の中に、詞女は其家に在つて定まる夫一人を、頼みに思ふ者に候處、其頼みに思ふ我等がみもち、いつしが愛想らしき辭も掛す、終に一度の添臥も無候へども、其色目も致さずして、親達大事夫大事と、辛抱に辛抱成され候段山々嬉しく存じまゐらせ候。今まですげなふ致せし事も、更々嫌ふでは無候へども、三勝とはそもじの見えぬ先からの馴染にて、子まで設けし中に候へば互に退去も成り難く、夫故疎遠に打過まゐらせ候。併し夫婦

は二世と申す事もそふらへば、未來は必ず夫婦にて候々、詞オ、是やまあ誠か半七様、こりや、い娘、未來で夫婦と書いて有るかいやく、アイ、未來は未來ぢやが、一日なりと此世で大夫にして遣り度い。何としてマア此半七は、善右衛門を殺しましたぞ、どれ、娘最少とじやぞれおれが讀みませう。兎角不幸の我等に候へども、死後には無やお二人や、宗岸様の御歎き、随分々々力を付け此身に代りて御孝行に成し下されべく候、申し残し度き事どもは敷々候へども、涙に字性も見え難く、あらあら惜しき筆止申候只々お通が事のみ頼上候、此上は亡人後のお念佛、南無阿彌陀佛々々々々々々、讀も終らず宗岸親子、又俯沈め

ば半兵衛夫婦、お通を中に抱き上げ初孫の顔が見度いさ心に思へど世間の義理ではまで逢も見もせなんだ、斯う言ふ事と知つたらば、顔見ぬ内が増してあつた。愛らし盛りの此お通、半七と一緒に暮すなら能い樂みで有らふ物、これ婆見やいの、あれ何にも知らず手打やあべいばつかりオイノ是や孫よ、モウ父も母も無い程に、此婆と一緒に瘦いよ、さはいふ者の乳も無く、今から先の寢起にも、無や歎かん親々が、知らずにあが胸愁者、惨い心いぢらしやと、言ふ聲洩るる三勝か、思はず乳房を握り締め、詞乳は爰に有る物を飲まして遣たい顔見度い、乳が張るわいのうと、身を標はせ、駆入らんにも關の月に空音も成らず羽拔鳥、親は

外面に血の涙、子はやすかたの安からぬ、悲しき迫る内と外、一度にわつと湧き出る、涙浪花江泉川小きんを汲出す如くなり半七は齒を嚙締め斯ばかり深き御情、是非もなや勿體なや、不孝を赦させ給はれと、悔み歎げば三勝も皆我故の御事と、俱に詫入る中に半七、詞何日まで泣いても返らぬ縁言親父様の御繩目、早う解くは身の最後、イザ、急が入サアおちやと立上りしむ、今生の別れにせめてお顔をさ差し覗よげ三勝も、お涙を一目と延上り、見れども親子隔ての關何と千萬無量の想ひ、両手を合せ伏拜み、合おさらば合々々々云ふ聲も歎きに埋む我家の中見返り、死に行く、身のなる果ぞ哀れなり。半兵衛はつと心付き、詞

此書置の文體では、今宵最期と決めし半七、宗岸殿も手分して行衛を尋ねん、サア早ふくく身づくろひ、立入んとする所に、思ひ掛なき表より、詞ヤア、方々、善右衛門を殺せし咎人茜屋半七召捕つたりと呼はつて庄九郎に繩を掛、立出る宮城十内、詞半七が殺せし今市の善右衛門は、國元にて用金を盗みし盜賊召捕に來りし處、一夜半七に殺されし由、則ち善右衛門の同類たる庄九郎を召捕り、彼が白狀にて半七親子に科無しと、立寄つて半兵衛が繩目解けば、人悦び、夢では無いかと伏拜み、詞これ親父殿、十内様のお情で半十が命助かること、のう、何ぞ命の有る中に、止めて下され半兵衛殿と、急るを聞いて十内

が詞半七は死に出たこと、エ、遅かりし残念々々、役目なれば心に任せず、夜明ぬ中に早お行きやれと、十内は花も實もある櫻井の、掟和ぐ國の名も、大和五條の茜染今色上し艶姿其三勝の言の葉を、爰に移して止めけれ。



守宮酒の段

中 竹本文字太夫
野澤勝平
切 豊竹古靱太夫
鶴澤友次郎

人形

御臺牧の方 吉田小兵吉
石童丸 桐竹紋司
妻橋立 桐竹紋十郎
監物太郎 吉田玉幸
女之助 吉田扇太郎
娘夕しで 吉田文五郎
新洞左衛門 吉田榮三

菊萱桑門筑紫鞆

守宮酒の段
高野山の段

書下しは享保二十年八月の豊竹座で並木宗助並木丈助の合作。元來菊萱の傳説を信州善光寺の親子地藏の本縁を主想とした縁起物語である。此淨瑠璃では筑紫の大名加藤左衛門繁氏は、酒盃に散る櫻花に無情を知り正妻と側室との假睡の中に、互に瞋恚を燃やす髪のはつれを見て、外面似菩薩、内心如夜叉の理を感じ發心して高野の山深く遁れる。時に豊後の大領大内義弘不逞の志を抱き、勅さ偽り、加藤家の夜光珠を強要した、其使者新洞左衛門の娘夕しで

守宮酒の計に、目的を達し得ない。繁氏の妻牧の方は石童を伴ひ夫を尋れて高野に向ふ、大内の兵は、其後を追ふが舊恩を感じる玉屋與次夫婦に助けられ漸く山に登る事を得たが母は女人堂で病死し、石童は辛じて父に對面する。折柄大内は、不逞の志、明かになり捕へられ石童丸は世に出る事が出来るといふ。守宮酒の段は明治廿三年十一月に故津太夫が、山の段は菊萱を綾太夫、石童丸をつげめ太夫(十三歳の時)金照二代目、叶の三味線で懸合で語つた、其後明治廿七年十月、同廿三年五月守宮酒を故津太夫が語り、此外題が最近出たのは、實に明治廿九年六月攝津大掾が守宮酒を語つた位で本年で廿八年振りの上演である。

(木本) 守宮酒の段 (中)

定めなき世をうき事に見限つて遁世ありし繁氏公歸國と偽り石童を後目に立て監物太郎國家を納る智仁勇、三國名譽の夜光の珠國女神と勸請し秋の最中の祭りに館賑はふばかりなり、御臺牧の御方石童君を伴ひ廣書院に出で給へば執權監物が女房橋立神事の祝儀申上げ夫監物太郎大内義弘の招きに寄て參られ御室の御神事にはづれし段お赦しと斷はり申せば御臺所心よからぬ大内の呼よせ我夫の行衛しれず石童は幼少なり何いひこさんも量られず只なつかしき繁氏公とこち給へば石童君かゝさん氣遣ひ遊ばすな追付け父様の所有を尋れ私か迎ひにまゐりますとおこな

しやかに涙もさまる折からに國一番のぬれ男其名自然と女之助兄監物が勘當請け託を頼みの奥書院うじくさして入り来る御臺は何のお心なくめづらしや女之助此程若も尋れしが何故登城めされぬとせにはつと頭をさげ私儀不行跡故兄監物太郎が勘當請けそれなる橋立殿を頼み様々詫ふれど聞き入れなく是非に及ばず今日は若君様や御前様のお詞をかる所存、恐れながら然るべふ願上げ奉ると願ひを聞いて御臺所以後をたしなむ心なら供にわびして得さすべし、幸ひ今日は御室の祭り國女神の御前にて禁打させん、こなたへと立入り給へば有難しと石童君を御供し奥をさしてぞ入にける、程なく歸る監物太郎、大内も難題胸に釘打

つてかはりし思案もなく廣間へ通れば妻の橋立義弘よりの呼寄せいかなる事ぞ心元なし及ばすなからお聞かせと尋ねれば、さればの事大内義弘は都の勅と偽はり近國他國の寶を集る是まさしく謀反の下拵へと見抜きし故我國には實なし、仁義禮智信の五字を以て寶とす、伍子胥が辨をかつてまんまと言ひ伏せしに多々羅新洞左衛門と云ふやつ夜光の國の由來を知つて汝が家に國女神とあかむるは齊國より渡りし夜明珠寶なしとは言はせむと明白の一言争ふにも争はず成程其實あり、しかし尋常の者携はる事叶はず甘と限て交合せざる女、あらば請取りにこされよ、男女の別ち知つたる者む手にふるれば忽ち玉の光り失せふと言ひ傳へを難題

に當惑させんと思ひの外彼新洞めが
娘當年廿まだ是までふぼんにて此役
目を乞請け親子連れにて請取に來る
筈、代々加藤の家の重寶渡さば家滅
亡、いやと云はゞ大軍を以て夜の來
らん、さすれば御臺若君のお命も危
ぶし、とやせんかくやと胸はごうづ
き思案あらば言ふて見やれと語る
を聞ぬて女房はほつこため息つきな
がら似せ物を急に拵へ渡さふより外
の事とはと言ふを打消しイヤ／＼其
の儀も思ひ付共うつかりと請取新洞
左衛門にあらずハテどうかなと大體
の惜もくだくる一思案及ばずながら
橋立も智慧の袋の棚さむしくらがり
さがすごとくにてしはしとほうにく
れけるがイヤ申しかやうな時は膝と
も談合と申します、幸ひ弟御女之

助様勘當の訃にお出機嫌直され供々
に御相談はと言ふに暫く上夫をめぐ
らし何弟のほうらゝ者奥へまゐつ
てゐるさなホウよき杵談杵手幸ひ思
ひつきあり女共汝も來れと立上る
心知られど橋立も夫の詞を力草件
ひ一間に。

(床本) 守宮酒の段 (切)

入りけり暫くあつて大内よりお使
者さ呼はる聲につれ月と雲との真中
に花と眺める後ろ帯、男のえらみの
ゆうしでが、かた笄の濡髪にさい
た白羽の鏑矢は、伊達か贖上か風俗
もしとやかに立ちやすらひ誰頼まん
と言入る、かゝる相手に相應の女房
えらみの女之助、いざお通りさいふ
内も思ひふくます目づかひにかはい

らしさが身にこたへ互に顔を見かは
して上座へ通れば橋立がやがて出
ひあたまからしつぼり向きの挨拶に
て是は／＼女中の御苦勞によふこそ
お出自らは監物太郎の女房、橋立さ
申す者、又是なるは主じの弟御、
女之助と申して武道は勿論、歌の道
戀の道、ならぶ方なき優男、則ちけ
ふの御馳走役御用あらばあの人へと
猫に鯉の引き合はせいかな釋迦でも
精進を落ても見たき心なり、女ごし
こそこなたにもこやかテモいかいお
心づかひ私はゆふしでと申す、まだ人
數にも入らぬ女、か様な役に參る筈
はなげれども人好みある寶物、親新
洞左衛門はお次に控へマアそちが請
取てこいといふ相應な役目を請、案
じ／＼參りしなり、事なふお渡しく

だされど詞の中より何か扱、お渡し申さいで何とせふ、夫も只今罷り歸り御臈の掃除暫くお蔭か入ませふや幸ひは御玉の祭り、神前へ供へしおみき頂戴遊ばし不淨を清めお請取それ、神酒と言に任せ對の徳利を一寶に下女が携へ差出す女之助、近く差寄り敵を招いて毒酒を盛り約を變ぜし例もあれば毒味致して進上と神酒を兩方つき合せ土器に十分と受け、ついさほしてゆふしでに頂戴あれと差ければ是は御念の入りし事縁につれたる神の酒、何お疑ひ申さんと一つ請て呑酒の忽ち五臟にしみ渡り、亂れかゝりし顔の色行儀も崩れ土器を女之助へさし戻すサアしてやつたと橋立が態さ咄しも打ちさけて近頃卒爾な事ながら頭にさゝれし

白羽の矢はいかなる故ぞと尋ねればこれこそ私が殿御を持ぬ申し譯、稚き時よりこの白羽家の棟に立しより神のおとぎの御座子となりしは、幸よい男好いた殿御のあるまでは人目の關の此白羽片時も放し侍らばす哀れ此矢を貰ふ氣なお人があらばやりたしと女之助も傍近くにじり寄たる亂れ咲花ならば打折る人は主様ならでと継り寄る爰ぞと心はやれども傍に見て居る兄嬢の手前を恥て薄紅葉たかをしめたる橋立が鬼も頼めば人くはぬいらざるお辭宜と無理やり手早く後より押やつて一間をびつしやりさすさばや内陣ひつそさしづまれば繻子の帯なるばかりにて物しづかにぞなりにける、橋立あたり見廻して女之助の放埒も禍三年時の用

しおふせたりと思ふ所へたゝら新洞左衛門生れついたる氣はいらち待久敷て次の間より歩み出コレコレ女中やぞ聞ておくりやれ、べら／＼何しておる事ぞとふくれかへつた鬘づらを引きのばさんと橋立が、やめて床几を參らせてたそ煙草盆お茶もてこいと馳走ぶりイヤ茶はたべぬたはこはきらひ、めつたに馳走めされても請取物に遠慮はないぞ、床几は役目恩にはきぬと腰打ちかゝる其内にも橋立は一間の首尾いかゞと思ひ立つ居つうるたへ廻はるをコレサ女中きよろ／＼と何しめさる、待かれてえぼし首こはばり申すと言ふてくれめせ、但しは直きに行かふかま立上ればア、是申今が神事の最中、ナニ祭

こはイエイナ、彼夜光の玉のお祭り
さまざらかし、隙取方便に傍へ寄り
お家の祭は先づ最初が鼻高、其鼻の
長さが三間半、次が御輿と灯燈、其
灯燈が餅搗て事の埒が明かぬかとい
かふ私は案じます、ア、是昇神事叫
し聞にはまゐらぬ御玉ばかり請取に
かやうの隙入合點ゆかすみにらみま
はせばチけふさがるばづみに何ぞい
な、玉といふに愚はなく唐土には片
和が玉、我朝にては驅籠の玉、伊勢
の國にはお杉とおたまさんだは人だ
まこはいは目の玉下女のたまでもか
るくしう請取らるゝ物かいな、マ
アおまへはおいくつでお名は何と申
します、ハテめんごうな事を尋ねる
名は新洞左衛門年は六十シタリテモ
扱もさつても若いお顔のア若ふござ

る、お耳も聞へお目もよいかへオ、
サ耳もめもよござるてやお齒はへそ
れもよいてやサア其よい内から人は
養生折々仙氣も出よふかなハテ出よ
ふさまさイエ〜そふ氣をいらつ
がいかいお毒、それ〜つむりによ
つほごしらがテエぬいてあげましよ
と立寄れば突さばしエ七面倒な女め
さかたへに立て大聲上ヤア〜娘夜
光の珠を受取りしか何しておるぞと
つかふごによばるゝ聲のひびきてや
心靜に寶塔を携へ出るゆふしでが
後についで女之財出るやいなや尊
敬し悉くも寶塔の内に込めたる御
玉は闇を照らす事日輪よりもあきらか
なる故夜光の珠とは名付たり、か程
貴き御寶をかるゝしく請さられし
ゆふしで殿は仕合せと挨拶すれば皆

これお前のお世話故と表向きなる互
いのじぎ、新洞左衛門笑壺に入りホ
チ、娘寶を異議なく受取つたか出
かした〜併し某し見分の役改める
爲拜禮せんぞ走寄て寶塔をひらき見
ればコハいかにまつくる〜さくろ
玉の鬘をつくれしごさくにて是はこ
ばかりゆふしで親千女之助も橋立も
共にあきれし顔付にてしばし詞もな
かりし、新洞いかつてヤア大盗人の
監物太郎改めずんばにせ物を持して
歸す工みよないテ寶藏へふんごまん
さかけ行向ふなさつご明け内より飛
出る監物太郎、腰をくろめししら
〜しやコリヤ〜新洞、先達てい
ふごさく不淨の女が受さらば玉の光
りを失ふさひいしは爰そ其女にせん
ぎが、かいたそこ退と打てかけりし詮

議のうら釘橋立わざとめよつてコ
レゆふして殿身に覺へあるならば有
りやうに白狀あれ一間の内で不義が
ましいみだらな事はなかりしかさま
ざ／＼しげに間かけられ何ぞ言譯ゆ
ふしでがすべき様なく髪にさす、白
羽の矢をばぬく早、矢の根を咽に
突立ち、是ばと驚く人々より半狂亂
の新洞左衛門いだし、かへて、コリ
ヤ娘わりや何故に自害する、いひ譯
なくばない様の思案もあらふに情け
ない大事の娘を殺すかささしもにた
けき武士の子故のやみに目もくらみ
どうぞ座して泣居たり、今を限りの
ゆふしでが、涙かたてにノウはづか
しや自らは此お館へくるよりもさる
お人をば思ひ初、情の道にまよへ共
大事の役目と心の胸つなぎ留しな情

なや御内室のもてなし酒あれなる神
酒を呑よりも不思議や五臟にしみ渡
り大事を忘れ何の其、まゝよのうへ
にはり持たされつひ下紐をさきそめ
て是非なく身をばけがせしぞやいひ
譯ならぬいたづらを詮議にあふて恥
かいてかくなり行くは神の罰、神明
いかりの鎗矢に射殺さるゝ覺悟して
死る心のかなしさ推量して泣涙袖
に餘れば血に染て見る目もいと哀
れなり、様子を聞て新洞左衛門すつ
くぞ立て走り寄娘わいひし神酒徳利
兩手につかんでヤア、心得ず、尤も
若氣さいひながら左程亂るゝ娘にあ
らす、仔細は此内現はさんご椽のか
まちに打付けく打わる中より守宮
のつがひあらはれければしつかとこ
らへ扱こそく唐土張花が博物志に

交合の守宮を引わけ酒にしたして其
氣を呑せば忽ち女の心みだす書現
はす、其理をしつて娘に呑せ性根を
みだしたづらさせ身がけがれた故
光りうせしと科をこつちへぬり付て
贖物わたす下こしらへ扱たくんたり
拵へたり憎さにもくし不義の相手是
へ出せ、すた／＼にためして胸をは
らさんご三寸魚板見ぬきし兩眼にら
み付てぞ詰寄るちつ共おくせす女之
助其不義の相手は、某御存分と押直
るチよき覺悟くばんれんさふり上
る劔のかげノウは待つてさゆふしで
か苦しむ体に氣もよばり心もわけて
せん方も泣よりほかの事ぞなき苦し
き中にも親の顔ぢろくぞ見ておい
さしや親ひさり子ひさりの私に別る
いおまへの心悲しい上にお腹も立ふ

さりながらたごへ守宮の業ならずと
ちよつと見るから思ひ初め心の先へ
穢れた物帯紐とかすご御寶の光り失
いでなんごせふ、かりの契りも二世
の縁、枕かはせば我ごの御、聲は子
ご言ふ世のならはし私ご死だ後にて
も篤ご思ひ念頃においごしかつてく
ださんせおぬし様も父上を親ご思ふ
て折節のごひおごづれを頼みます親
に先だつ我心、推量してかはいやご
思ふて一言未水まで夫婦さいふてト
されごしやくり上たるくごき泣き合
す兩手も暇乞あへなく息はたへにけ
り、わつご泣出す新洞左衛門じだん
だ踏でへエ、しなしたり情なや我堅
意地な心から一生夫は持さわごいふ
たを誠ご思ひつめあへない最期をこ
げけるよなコリヤ未水で夫婦ご悦へ
共悲しむ親ご此世からそれが見へる

かたわけ者、思ひ出す事ばかりをい
ふて死すご何なき此身を早ふむかふ
てくれ六十越て子にはなれ何を頼み
の婆婆世究情な我身や不何な娘
のさいごやむなしき骸を抱しめ人
目も恥じづ大聲上げ前後不覺に泣き
ければ女ご助も橋立もさつしやつた
る共涙、涙々は谷々へ落て流れて
大川にぞろのふちなす如くなり、な
げきの内に爺物太郎御寶塔を目通り
にすへ女ご助を引直し汝此ごごく光
りを失ひし不義の相手討て渡す覺悟
せよリア新洞受さられよさいふ聲に
涙拂ふてすつご立アア人そばへす
な其手はくばぬ、義理立てせば助ふ
ご思ふがいつかな、眼前娘の敵
人手は頼まず我手にかけてまつ二つ
うらみをはらすそご退ご飛かづつて
抜刃にはつしご切たば件の名玉はは

さばかり人々はあきれて言葉もなか
りしご女ご助聲をかけ、手がまはり
しか新洞左衛門せかれず共サア首ご
差付くれ共目にかけてす切わりし十ひ
つ撫みご陰陽和合をきらひ、光を失
ひわが娘によくも自害させたな、ア
我子の敵思ひ知つたか加藤の家の名
下は目れご目からはしつかい藍玉、
持て歸り主人に見せ恥現はして腹居
てくれん必ず後で其玉は嬰物なご
争ふな、爺の贖があるならば石童や
御幸に持せ早く出家を捨てさせよさい
ひおしへたる詞の裏、表は怒り心に
はせめて涙が手向共なれよさかける
情けをば袖に隠して立歸る折よしご
御臺若君かけ川賜へば女ご助新洞の
詞のはし御兩所の身の上氣遣ひ幸ひ
我君高野に御座あるごの風聞夫を力
にお供せんいざさせ賜へご進め立件

高野山の段

荊萱道心 竹本大隅太夫

石童丸 竹本小春太夫

鶴澤道八

人形

荊萱道心 吉田榮三

石童丸 桐竹紋司

ひ出れば蓋物太郎ヤ待弟、汝生れ付く好色者、未だお若き御壘所預けやる事覺束なしといふより頼て守宮を引さき死たる血を腕へぬり付けこれ見賜、兄者人守宮は不義をすいむれ共其血はかへつて不義現はず唐土秦の始皇三千人の宮女に不義有んかと思ひふかく残す肘に是をぬる不義ある者は忽ち落ちて後なくなるためし、さるによつて守宮さいふ字を宮女を守ると言ふ心でみやもりと書傳ふ、我朝にては萬葉集ぬぐ沓の重なる事の重ならば守宮の印かひやなからん、くつ重なつてさへしるしは

落るとよみし歌まして三代祐恩のお主に對して不忠不義天命いかでと言はせも立てずチ、出かしたゆけと一言が兄のなさけのはなむげや、御壘若君立わかれ高野の山のみれにある

我夫もろ共歸りこんど、つられ賜ひしこのはもそれはまつこしまつまではお名残おしやと橋立がかけよるをおし隔てたがひにさらばおさらばの聲をちからにわすれ草伴ひ縮を出賜ふ國におもひや残るらん。

(床本) 高野山の段

行空の雲間に近き八葉の峯に紫雲の棚引きし高野山と聞へしは三面に山連なりみなもと一水にして萬水東に流れ大師二犬に道をならひ開き始めし靈地さかや痛はしや石童丸かゝる難所をたごゝこ心もそらにうき草の根ざしの父は顔知らず名のみしるべに尋れゆく、袖の涙を哀れなる思ひ高野の谷川やゆんでば岩間、めてはあまの、山おろし峯にけふりの一

むすび見上て通る不動坂ふみもかよ
はぬ丸木ばし名残情けも横吹の嵐に
木の葉ちり果て心細道つく杖はおり
つのぼりつ行先をさへご岩根の松か
げにしばし休らひ賜ひける百年の榮
耀は風の前の燈火悟れば我も佛なり
ぼんのう菩提と諳めて加藤左衛門の
尉繁氏入道荳道心と名を改め佛法
修行の山坂をたごるも後世の便りか
や石童親子のきえんにや思はず傍に
走り寄り、申し御出家様此御山に今
道心のましまさばおしへてたごあ
りければコハけふがる少人かな九百
九十の寺々毎日入来る初發心きのふ
そつたも今道心一昨日刺たも今道心
左様に尋ね賜ひては知れがたし、俗
の時の名をいふて尋ねられよ身の
上の事共しらす仰せ有る、さればこ

よ尋ねるは自らか父上二つのさし別
れし故お顔もしらす元はつくし松浦
黨加藤左衛門繁氏様さいふより扱は
我子かと取すがらんさしたりしがま
てしばし、佛前にて誓ひを立たる恩
愛いもせ爰ぞと思ひよそく敷ムウ
年もゆかぬにはるんこ、したひ來
る心ざし誠の父が聞かれなば嘸嬉し
くもなつかしく飛付くやうに思され
んさりながら此山の掟にて、たごへ
廻り合ふたりさて名乗合ふ事かつふ
つかなばす早々國へ歸り母御を大事
にかしづくが又一つの孝行と言いお
しゆればイヤノカ我國は大内さいふ
者責なやまし母様諸共此山の麓まで
参りしが悲しき事は母様が道のつか
れに煩ふて命の内になつと目父に
合はせてくれよさのお歎き情と思ふ

て御有家御存じならば教へてさ目に
もつ涙はら／＼と押へかれたる有さ
まに我こそそ名乗て聞かそかいや勿
体ない師の御坊のいましめさいふて
はるんきた者を知らず顔見ぬ顔が
ごふなるものぞ不便や胸にせきく
る血の涙こたへかれて思はずもわつ
さばかりに泣賜ふ石童丸は目賢くさ
ほごに歎き賜ふのはもし父上ではあ
らざるや早く名乗て賜はれさすがり
歎かせ賜ふにぞ亂れ心の折ふしに後
ろの方の岩かげより師の阿闍梨の聲
さしてヤア／＼荳奇恩入無爲／＼
の誓ひを忘れ賜ふなとせいでせられて
荳萱は起き上てふり返りハア／＼そ
ふじや迷ふたり誤つたり今此三界悉
是吾子いづれを我子と思ふべき師の
手前も面目なしと衣の袖を打はらひ

くハレござかしき少人かな哀れを
 俱に見捨れば我を父よま絶る事けが
 らはしやいまはしや、おこさか尋ら
 繁氏入道此山におはせしかども諸國
 修行に日賜ひ今は行衛も知れざるぞ
 いそぎ下山し母親の病氣の介抱召さ
 れよとつれなくいへどごやらに残
 る詞のいやまさり何父上は行衛もし
 れず此山におはせぬさやノウ情けな
 や淺ましや我はさもあれ母様ごが
 れ死をなされふかそればつかりが
 悲しうて後へ戻るも戻られず似た人
 にてもあるならばあはせてたべこか
 きくごく心ぞ思ひやられたり、俱に
 はりさく思ひをば押し隠して懐ろよ
 り包みし薬取出しコレ是は師の御坊
 一萬座の護摩をたき調合ありし妙薬
 母御に用ひ看病あれ来た道筋は難所

にて草臥足で葉ふまじこちらへ行
 けば花坂さて開ちも同じ事、馬もあ
 り駕もありいざ、立て行かれよこ
 心づよくも引立られ石童丸け泣く
 も薬もあるを力にて押戴きくぜひ
 も涙の泣き別れ迷ひ道をばそこ爰さ
 教へなむらもかるかやは心元なき思
 はずも引かる、線のごもづなや見へ
 つかくれつしたひ行く息をばかりに
 玉やの與次御臺所をおい奉り娘を
 引連れ女人堂まで来りしが後先なか
 め片影におろし参らせお心持はいか
 ゝぞま申しあぐれば御臺所苦しき体
 を押かくし自事は思はず共お将を
 すくふてたもるのが我爲の良薬その
 たもふ詞に後先を思ひ廻して猶豫せ
 しがいか様女の手業に追手をふせが
 せ見捨て置くも心元なし仰せに任せ

引かへし申すべしコリヤくかごた
 大事のく御臺様じやぞお傍を放れ
 す御介抱申せお腰でもさすらしてご
 ざりませ、つゝ居てまいるご口かろ
 く飛ひごごくに引かへす、御臺はお
 もる病の床涙ながらにノウかごた向
 ふの道より石童が歸る姿は見へざる
 か戀しの我子やなつかしの我夫やこ
 あなたを見ては打たをれこなたを見
 てはふし轉ひ最期も近き御有様かご
 たは悲しくコレ御臺様さ々様やか
 様の歸らしやるまでごふぞまあ死な
 すに居て下さりませとあごなき詞か
 いしよなき娘の肩に介抱せられ自ら
 も石童が便り聞くまでくさ氣のは
 る弓の弦きれて死る今けになりしぞ
 や與次夫婦が歸られなば石童事なく
 れくも頼んでしんださいふてたべ

せめて最期に夫や子の顔見る事が叶はずば聲なきに聞て死たいと、御山の方を打眺めながめてもくごいても達れぬ事かとしやくりあげ泣れもつらやいきけれのつゆの命のはかなくもきへて後なくなりたまふ、かごたはあはてノウウこれ申申さといへど其かひも泣も泣れず立つたり居たりかゝさま呼に走らふか、さゝ様はなぜ遅いと坂をかけおり聲を上げさゝ様のふかゝ様のふ御壘様かしなしやつたコレのみ戻つて下されと聲をはかりのさけび泣断せめて哀れなり、頃は臘月雪ぞらにえびみしほしき山おらずかばぬくを引かへて死骸にたぞればのふ悲しやさかけ寄つてあなたをおへばこなたからたかりかゝればせんかたも小石を拾ひ打つ礫そこ

よ爰よさかけ廻り体も息も絶る程父を呼び鳥をおひ追めぐれ共小娘のなくれもつらき折柄に石童丸はかちばだしかくと見るより走り付むらがる鳥を切りばらひあへなき死骸をゆり起しノウウ情けない母様かくなりたまふ事ならば何しにお傍を放るべき父上には得あはずお前に別れて私は何さならふと思し召す、これけつこうなとお薬を御出家様にもらひました是を上つてまめになりたつた一言石童かさもののいふてたべ起てたべと薬取り出しかみこなしかひなき母にふきこんでノウウ母様くさおこし立てだきかゝへ前後深くに泣賜ふかゝる哀を遠目から見より思はず菊萱道心走り寄りしが是までさへ立てし誓ひを今更にもむげにはせじと目を押しぬ

ぐひコレく少人悲しきはこそはりながらいたく歎くは佛の迷ひいでく回向し参らせんま口に稱名心に我をしたふて遙々海山こへて來りしに妻子かさも得言はずに、よそにあつかふ我心草葉のかけから無恨みん、赦してくれよ我つまと念誦に交る胸の内留めかれさせ賜ひけり、然る所へ與次夫婦かけ戻りヤア御壘様は御最期かと驚きさはげば女房お菊萱を一目見て、のふお久しや繁氏様と言ふに石童何此お方がさゝ様かなつかしや戀しやと縋り賜へば衣の袖打拂ひく逃んさしたまふうしろよりヤレ待たまへ我君と聲をかけて監物太郎大内之助に大綱かけ息をはかりにかけ來り勅命受けて一戦に討ち勝ち生捕て参つたりいかゞはから

ひ申さんさいふより與次が踊り出で
何かはなし急いで首こ、既にかふよ
と見へたる所へ暫くく、と新洞左衛
門飛鳥のごさく飛來り謀反人とは言
ひなからいまだ旗をあげたにあらす
一家中の歎きを思召一命助け賜はれ
と平伏すれば荊壹道心助けることも殺
す共私にははからひかたし都へ行て
奏問さげ命乞ひして得さすべしそれ
を我子石童が筑紫へ送る轡と仰に
よつて引立る大悪無道の強敵も我神
國のみしめ繩おさまる御代のためし
とて悪人亡び國安全、民もゆたかに
萬々歳千世を祝ひし筆のあと、永く
も語り傳へたり。



赤坂並木より
古寺まで

彌次郎兵衛 喜多 和尚 親父 松

豊竹つづめ 大夫 竹本相生 大夫 竹本和泉 大夫 豊竹和泉 大夫 竹本源路 大夫 竹本隅榮 大夫 豊澤仙 助 豊澤廣 助 鶴澤芳 之 鶴澤重 之 鶴澤友 之 鶴澤清 二 郎

人形

喜多 八 彌次郎 兵衛 松 桐竹紋十郎 吉田扇太郎 吉田榮之助 桐竹門造 親千 父 古寺 和尚 古寺 小 兵 吉

喜太 八 道中膝栗毛

赤坂並木の段より
古寺の段まで

この淨瑠璃は十返舎一九の名作「東海道膝栗毛」の趣向をそのまゝ脚色したものでこの段の内容は彌次郎兵衛と喜多八が赤坂並木で失敗し喜多八は寺へ遁げこんでゐると彌次郎兵衛が死人の姿で尋れて和尚に愚弄されるがそれは悉く狐に化されてゐたといふ面白い彌次喜太道中記です。

床本 赤坂並木の段より

古寺まで

(語) M いでや此春の景色の麗に

おふさきるさの稀人も袖ふりはへて面白や(狂言 是は關の東に住む喜太八彌次郎兵衛と申者に候 扱も此度都方を見せばやと思ひ立て候 殊更けふも早日くれて道を急ぎ候 程に宿を取らばやと存じ候 (鹿ナドリ) 東路をいつしか後に三河路やあた二川も打ち過ぎて歩むに馴ね旅づかれ物岩穴の觀世音御燈のかげもほのぐらき御油の宿をも開放れて並木原にぞ着にける。喜太八かたへに荷をやつとこささおろしハ、ヤレくくくくだびれたく此マア彌次様は何をしてゐるんだるア、早くくればよいにナア後の茶店で聞けば何でも此松原にはわるい狐が出るこの事だがア、くらははくらし提灯はなし何だかうそ氣味のわるい事だなア

此彌次様はなぞ遅い(ナゲアシ)わら
 じが切れたか門止かま後を見やりつ
 延上りまつ毛をぬらす後よりも彌次
 郎兵衛は喜太八がかれての憶病知つ
 たればおどしてやらんぞ小隠れし思
 ひ付たる狐の面手拭のばし引結び顔
 へすつほり引かぶりさし足拔足後よ
 りロイ。ア、申し御免なさりま
 せ。くくわるい狐さは申しませぬ
 よいおきつ様でござります御免く
 さいふ聲ははの根も合す膝がたく
 彌次郎兵衛俄に作り聲ヤイくく
 ヤーライノヤイヘイくくヘイく
 くのおへらヘイのヘイくく
 儂憎い奴、けふもかこかき共が錢を
 一本ちやらめかし酒肴をおごりし事
 よもや忘れはしをるまい。ア、申々
 お前様はよふござんじてござります

なアほんのそればでき心慾氣ではご
 ざりませぬア、イヤくくぬかす
 まいくくまだ有るく鹽井川では故
 もなき座頭の肩におぶさつて川を渡
 りあまつさへ座頭の買つた其酒を盗
 喰ふコナ横道者めがア申々其かわり
 尻が割れて酒代は皆わつちが拂やし
 たから其勘定は濟で御せエやすぬか
 すまいまだ有るく日坂の泊りでは信
 濃みこのば、アが所へ夜道にうせ佛
 壇の中へすてふてんのてこなさお
 つこちた其騒ぎを儂が連の佛の様な
 彌次郎兵衛にぬり付け儂はぬくく
 しらぬ顔重々の不屈者めが其かわり
 には是をくへご傍に有り合ふ馬の糞
 杖につくかけ差出せばエ、其馬のふ
 んを私にチイノエ、いやか、じやご
 申して夫れがマア、喰れば連行くサ

アうせいア、申しくく實は私の
 お袋が今わの枕元へ私を呼コレ喜多
 公やたごへごの様な事が有つても馬
 のくそだけは喰てくれなごの遺言で
 御座りやすごふぞ此儀は御了簡ム、
 然らば此以後汝が連の彌次郎兵衛が
 申す事何によらす背きはせぬかハイ
 くく何にも背きは致しませぬム
 夫なれば此荷物も汝も荷物ご一つ
 にいたし赤坂の泊りまでかついで行
 けア、アサ早くかつげいアイサア早
 く持て何をうちくするぞいやい行
 けさいは行かぬかハイ只今まいり
 ますはいのさ荷物取上げつくく見
 てチャ此荷物は私が連の彌次様の荷
 物によふ似た様なごはく眺める
 なりそぶりヤアおまへは彌次様じや
 ないかテモ扱もひごいぬにあはした

のさいへば彌次郎兵衛吹き出しハ、
い、ハ、い、い、べら棒めいかに憶
病じや逆餘りだ、ハア、い、ハ、
い、い、イヤマウ彌次さん餘りおめへ
の事ぢやれいか悪いしやれだぜ只さ
へおつかねエと思ふて居る所に思ひ
がけなふワイと言はれてイヤモウ
くくあつたら肝をひやし物にし
やしたハ、い、喜太公くサア
くく氣けんを直して早ふ赤坂へ
居て泊ふくそんならそふしよふサ
ア是からは二人連だこはい事も何に
もないぞヤイ狐め出て見やがれエ、
おいらアお江戸は祠田八丁堀九尺二
間の城廓がまへ十二文で湧す水戸の
水でみがき上げた喜太八様さはおら
がこつたいたれたと思ふエ、つがも
れエコレサ喜太公こふきに力むじや

れエかそんなに力むさ又何のワイア
コレく御めんだくエ、何
のこはいと思やこはしこはくないさ
思やどふしたさ、猶おつかねえやこ
んな所に長居はおそれサア行か
ふさ兩人荷物を一荷にさしになひ
んさこさどつこいしよく坂は
てるく鈴鹿はくもるエ、喜太公て
めへも何かやれよおれは今おどろか
されて聲もなにも出やしれエそんな
事云はずにやれよ笑つちやいやだよ
何笑ふもんかいそんならやるさ土山
間の間の土山雨がふるハ、うんさこ
さどつこいしよア、コウく彌次様
くア向ふの方に何だかコウ白い
物がちらく見えるはアリヤマア何
だ有ふなム、アレカアリヤらいさも
のちんちよふよナニ大黒様のちんち

くりん何をいつてやがるんだい、甲
の提灯だエ、そんなら爰は墓所かエ
いきびの悪い何だかコウ首筋がそ
つくさする様だエ、コリヤ折りわ
るふ又雨じやいまくしいさつぶや
きく行先へちよくく小坊
主が形にも似ざるばつてう笠徳利片
手に歩みくるそれを見るより喜太八
がソリヤこを出たば化物じや彌次さ
んゆだんせまいぞやさぶるくふる
へば彌次郎兵衛幸ひ有合ふ天秤棒腕
に任してぶちのめせばアイヌく
くアレくさ、やアイ誰かひごい
めにあはせるはヤイトいふ聲聞き付
けかけくる親仁此体見るより恸りし
彌次が胸ぐらしつかさ取り此悴には
何さか有つてかはいそふにぶちのめ
した有様にサアぬかせ聞かぬくこ

すから金は胴巻に入れて腹にまいてござりますおさつさんお前さん一寸手を貸ておくんなさいチ、そふで有るくそんなら出してやるこれかく、ホ、ア、そりやしらみ紐でござりませ、なんだきたないやらふだなそんなら是かア、ク、く、く、く、く、く、つたいくそりやへそだく何だへそだてめエのへそは大き出べそだなアハア、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、其下の方にきんが二兩包んでござりますそれおまにはエ、いまくしいべら棒めそんならいつそ此きんをさ力に任せ引摺みぐつさしむればア、イ、タ、くく死るはいくくハア、さ、斗りにうんさ其ま、いきはたへにけり追の親仁も恠りしなむ三死だは是幸ひと彌次郎兵衛が帯ぐるん、さすつば

りはいだる丸裸墓所の方よりさつかばさ経帷子につの帽子手早にきせてサア、これでちつこは腹がいたかうやく代の其かはりさ着物荷物を引さらへ千松よこいさ手をひいてあし早にこそ立歸るしだいに更くる夜嵐のぞつこ身にしみ彌次郎兵衛息吹がへし起上り、寒くこはマごこじやしらんでおればマア一体ごふしたのじやエ、こふさエ、マア御油の宿を放れて狐のまねをしたばト夫から小僧をぶつたはト喜太八は逃たはトそこで咽喉を上げられたはト夫から後はさんさ夢中で何にも覺えがれエんだがコイツハ夢が知らんてチいさむくイヤく向ふにはかしよが有るはいして見りや夢ではないはいハテごふしたんだるふさ撫廻し

くヤア、くくおれが着ているはコリヤ経帷子じやそふして額にごましぼが當てあるヤア、くくそんならおれは死だのかハア悲しや扱はきんを上げられそれで死だかハアヤア、くそんなら爰はめいどの道かいやい、くア、凄まじしい心細い身に成つたこんな事ならか、アにもさつくりと暇乞して置ふ物こんな早死ふさは知らなんだくめいどの道はくらしい聞いたがほんにコリヤ眞くらがりだごふぞ極樂へ行きたい物じやが十萬億士とやら言ふ大体では行かれまいア、心細い、斯成る事共露しらす嘘や後にて女房がけふは御ぶじの便りも有るかあすはつかひの人もやまじをかぞへ指を折り待たれたるかひもなふ死ださ言ふ事聞た

なら嘸も悲しかる口おしかる逢たかつたで有らふのになぜ逢はしてエ、コレ下さんせぬぞいな魂魄あの世に返るなら最一度か、アの顔見たや夫迄もなく今こゝでおれが死だら後篇に嘸や一九がこまるで有るそれも悲しいか、アもかはゆし心 つを二道にめいごの間に迷ふとは何の因果ぞ情ないごふぞ今一度生かへりか、アの顔が只一目みたいわいのと身をもたへす、り上げたる水ばなと涙と涙一時に落て流るゝ三つせ川末は漲る風情也ハア、迷ふた、アノ鐘の音は慥にお寺極樂浄土の導引頼みお十念でも授からふヲ、そふじや、こ立上り鐘鳴方を知るべにてたどり行こそはかなけれ(文彌)かくともしらす喜太八は漸遁れ此寺へ一夜の情丸

寢して夢となく又現とも泣寝入つたる折こそ有あはれよのはかなき物ばかりらふの(文彌)ありやなく、彌次郎兵衛死だご思ひつめたさをこらへかれたる雨涙火かげしるべに立よつてさも哀れげなるこはれにて申し、私は婆婆の者お願ひ有て参りましたごふぞお願ひ申ますこいふ聲聞き付け和尚は立出で誰じや、何用じやご戸口の撰表にも和尚様私は今すぐ死たてのほや、亡者で御座りますごふぞお願ひ申しますこいふ聲寢耳に目覺す喜太八起ると明ける門の口彌次郎兵衛が姿もくら紛れこらへる袖のふり合せ和尚ご心へ彌次郎兵衛をむりに引込み取りちがへ戸口を内からびつしやり引立てソリヤこそ亡者が來おつたぞ和尚様必ず外

へ出まいぞや戸口はおれが押へて居るア、門に居るは幽靈じやて儂を入れてよいものかさいふもがたく、膝わなく寺のじしんでごうぶるひエ、何だかコウまつくらむりでは何にも分らぬ火打ちいづくさくらむりをさぐる手先に火打箱がち、ふるふ附木の光リヤアコリヤ和尚じやない幽靈じや、ア、赦し賜へ、ご着物にあたまへすつぼり引かぶりへ正体さらになかりける彌次は恨のふるひ聲ノウ恨めしい喜太八め儂おれがしめ殺されるを見捨て能も迷おつたなア、赦し賜へ、イヤ、恨の魂魄此世に残り汝もめいごの道連れにいざ連行て思ひしらさん來れや喜太八サアこいご付廻されて喜太八の氣も魂もきへ入る斗

リヤア／＼／＼そんならお前は殺されて迷ふてきたかハア悲しやそふはしらす今迄も此彌次さんばごふしでぞと案じて後へ戻らふにも何分こはくて一足も後へかへれる事かいのせふ事なしに此寺頼み泊てもらふた斗りじや是迄のよしみを思ひ恨をばらして浮んでたべなむあみた佛／＼南無妙法蓮華經／＼おんあほきやべろしやのおまかほたらばにはんごはちんばらばらばりたや助け給へて理王の命高間ヶ原にイヤ／＼／修羅のくげんも其方故只恨めしやひやめしやお茶のめしや麥飯やそろ／＼になら／＼連行くこ又立よれば身をちやめア、ア人殺し助けてたべ和尚様／＼のふと呼はりわめけば戸を

蹴放し和尚はかけ入り押し隔て珠數さら／＼押しもんで東方には五三南方にはぐんだり夜及明王西方でん／＼九馬の三北方句二は五六十中央だんまりふさい明王五千有りや所詮ふけん／＼泊れや／＼浮めや／＼祈りける胸に當りし彌次郎兵衛赦させ賜へア、うくるしや我こそ東の都に住む彌次郎兵衛と言ふ者なり御油の宿の泊りにはすれ不慮のさいごを遂げたりし日頃からの念佛ざらめいごの間路に方角知れず何卒出家の御情に彌陀の御國へ御導引頼み上げます／＼涙と鼻を横なでに恐れ／＼て願ひける和尚うなづき善哉冥途の道の引導は差當たる愚僧が役。去りながらふせない經は讀が

たし地獄のさたも錢次第布施物持參召されしかさ聞いて彌次郎兵衛あたまをかき成程御尤路銀も少々有つたれど御油の宿にてすつぼりはむれ身はちやんぶらのすかんびんごふぞお慈悲に結縁にて、彌陀の御國へ御いんごうお授けなされて下さりませア、ア、近年世むらむ悪ふて寺から里の力持それ故けんぎんかけねなし。錢なき衆生は助からず七里けんばいぜかせ／＼ハアそれは何共せひがないコレ／＼喜太八今聞く通りの此仕合せぞ貴様が持っている路銀をおれにかしてたもエ、めつそふな／＼此金かしてたまる物がエ、さんだ事／＼ム、そんならいやかエ、恨めしやア、コレ貸はいの／＼肌

付けたる胴巻をぐる／＼はづし和尚の前さ
もおしそふに差出しハイ／＼申し和尚様此
金は私命代りのなれどコウ見込まれた
らしよここがないどうぞ是にて御引導授け
てやつて下さりませ。チー善哉／＼去りな
からコリヤコレわづか二三兩十萬億土の道
なれば宿々泊りのはたご代きちんにしても
たらぬ／＼其上三づの川の越錢ば／＼アの運
上極樂の東門番への心付四十九日や五十兩
合せて百兩百々日の追善供餘御茶湯代にも
たらぬ／＼じやま申してモウ夫切一文もこ
ざりませぬ身に付いた物さては千年観音様
ばかりムーそんならそこで裸になり着物残
らずぬがつしやれエー夫じやお前寒ふてこ
らへられませぬはいのムーそんなら死人は

こなたの連なれば連れていんでもらひませよ
エーめつそふな事おつしやりますはいな然
らばぬおつしやれじやま申して是がマアそ
んならおれがおはれうかアコレ／＼さん
だ事／＼幽靈をおふてごふ成る物がそんな
らぬがサア夫はサア／＼／＼エー是
はまた情けないムテ何んせふせひがない
アーぬぎます／＼／＼ごふせふ／＼に帯ぐ
る／＼ご布子諸共引丸め差出しハイ仰せに
随ひ脱ましてござりますチー善哉／＼然ら
ば道引致さんご珠數取り上げて勿体らしく
汝元來しやれきのこそく臨終正念ちや／＼
むちや／＼足は飛ぶに任せ歸るを知らずこ
いつ元來江戸子にてぢんばら／＼はらばり
込み金銀財宝芥の如く遺ひなくし女郎小郎



現代的

電話戒三七五六番

下女藝者後家尼人の女房までちやらくらこ

んたん手くだをもつておんころくせんだ

りまきやアおんころくせんたく婆アのふ

まくさんまんだのふだアさんせんたくじや

こいつは一たいどうらくじやなむ三寶めつ

ほうかいむ中さんくらつびらんぐはい五

十三次股にかけて道中たつしやしやれ悪口喧

嘩口論其くせ聞た風めつたむせうつよい顔

お先まつくら大きに憶病それ故丸裸やみく

も言語同働何ぞいふと畜生呼はり馬牛犬猫

ちんあしたに道を聞て夕に死す共何ぞいと

はん丸ばだか明朝さめ來つてすべて夢のご

さく恐るべしく此行先はこもかぶり行た

い所へつくと行けと衣裳路銀を引さらへ一
間の内へ入るよと見へしが和尚が姿忽ち

に有りし家居も一時にきへて後なく明烏只

ぼうぜんも彌次郎兵衛ごふしてこへ喜太

八も互ひに顔を見合せて、あきれ果たる馬

鹿らしさアコレく彌次様お前の形はソ

リヤ何さいふ形じやチャくくくこり

やどうしたんだるおいら夕ア死んだばうだ

がカノ親仁めにすつげつさはがれて仕舞ふ

た、サアわしも坊主に皆取られ裸白貫一文

なし今の坊主はごこへいたのやつぱりあい

つも狐で有ふ大そふにばかされたぜ、イヤ

コレ喜太八どうぞ仕様は有るまいかどうと

言ふたら乞食より外に思案はないはいなア

アコリヤヤ、イそんな心細い事いふなやい

それださいふてどうなる物かお前も裸おれ
も裸かうも有ふか狂歌 M びせうぞ何ん

は用御の電話お

南 5番・701番・711番
(最) 132番・5291番
西 630番



の夏つばなか期
づまは會宴御

いのじ感・いか温

理料泉温一南

のまさなみ
理料泉温一南

橋 ツ 四

とおしやうにみなさられやうくじゆばん
 一つ喜太八さハごうだい中々うまくやりや
 がつたそんならおれも一つやつてやるふエ
 いこふつまゆうべまでかされ着てゐた
 彌次郎兵衛けふかたびらになつた哀れさ。
 ハー。ヤ夜があけたにこんなさまでうろ
 くしてもいられまい何かよい思ひ付は有
 るめエか有くコレこゝにほうきの古いの
 がある。是でおれが奴ふるからお前は其下
 駄の古いので拍子を打ちなさへそふして成
 りさも行ふじやないか。イヤコイツハちゑ
 だ面白い、そんなら喜太八ふりだせるさつ
 かけべい(行列)ハレロイサノサ夕アもさん
 ぐ化された裸で道中が成る物が成つても
 ならいでもしよこまがないハレロイサノサ

コロロイサノサ馬鹿な宿入り大鳥毛 ヒン
 くドウくじやんくく夢ちをたごる
 こゝちにて膝栗毛逆世の人の笑ひの種さ成
 りにけり。



大坂御池橋

茶屋

電話新町三二番

四ツよ 五月の文樂
 橋り 消息日誌
 醉

△五月一日

五月興行晝夜二部制の初日開場。

△五月四日

長野縣立諏訪高等女學校生徒修業旅行の途見學に立寄らる。

△五月五日

鹿兒島縣立出水高等女學校生徒七十名は篠田教諭に引率されて來觀せられました。

△五月六日

午後三時より文樂協會創立委員會開催會員募菓其他優待法會議。

△五月七日

BKの中繼放送、津太夫の「志渡寺」放送す。

△五月十日

文樂會開會。

△五月十一日

文樂協會第二回創立委員會開會。伏見宮妃殿下、寶塚ホテルより御來座。

△五月十四日

東京お茶の水高女專門部女生二十五名來觀。

△五月十五日

フランス東洋艦船司令官ベエル・ツロ中將夫人令嬢二名一行神戸より來觀記念寫眞擲影。

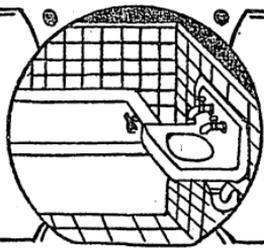
△五月十七日

京大御在學中の東伏見伯は尾島家令を伴はれ御來座晝夜共御鑑賞あらせらる。

△五月廿一日

五月興行晝夜二部制を打上げる。

化粧多イル
 水道衛生工事
 洗面、浴場、
 水洗便所設計
 汚水淨化装置
 特許無臭便所



西區立賣堀北通一丁目
 新橋
 岡部商會
 電話新橋一六二七六九
 阪急夙川

岡部商會支店
 電話西宮一九七六

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食さバー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合いますから一幕前に豫約を願ひます。お仕度を整へてお待して居ります。

賣店は

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雑誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。

お煙草は

一階二階廊下に喫煙臺を備へてあります。からお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。御座席では御遠慮下さい。

品御携帯

正面一階に御預り所が御座います。からお持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備があります。おそれへお願ひいたします。

御歸りは混雑いたします。から成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。充分注意致します。が不可抗力の損傷は何卒御諒承下さい。

お出口は

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品は

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのときは御携帯願ひます。

お場席券

各自に御持ち下さい。切符に一枚づつ番號が附いて居ります。からお場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします。

案内人へ

御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

幕間中は

案内人がお茶を差し上げます。から御休憩所で御自由にお飲み下さい。

場内にて

寫眞撮影は絶對にお断りいたします。

出演者

病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めます。から、豫め御諒承願ひます。

當座御使用の

場合は事務室へお申込下さい。『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種催物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります。

御休憩の間は

一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ります。から御使用下さい。ムシダオルはレイトローション使用。

四ツ橋

文

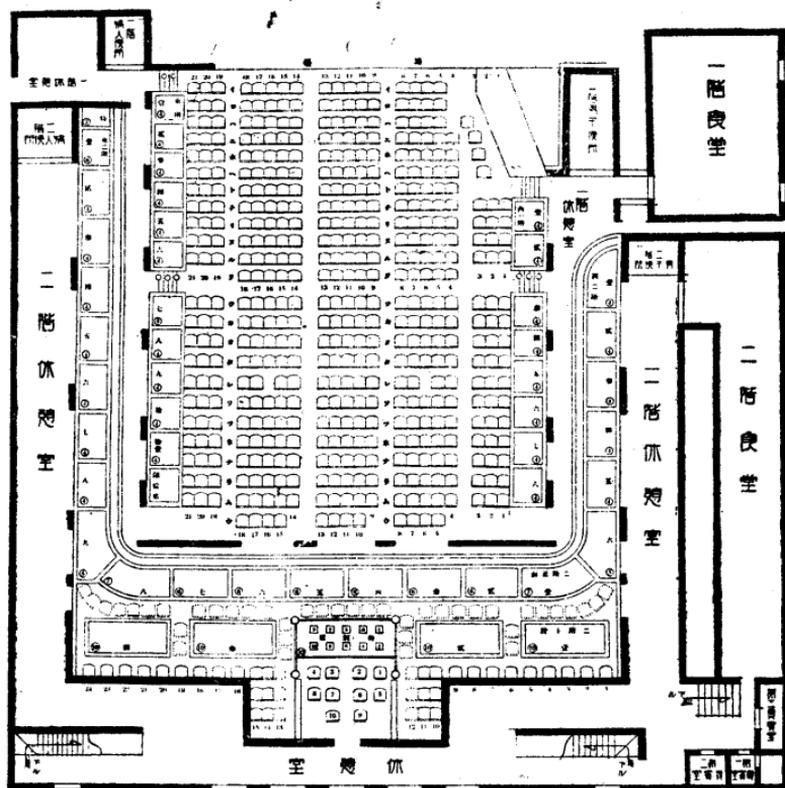
樂座

前賣切符専用電話番四七二番

電話南

七四〇八番
三七八八番

内案御席場御座樂文



御観覧料の外一切御不要の上大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出来、またお出入が御自由です。

前、賣切符、壹等お座席・壹等椅子席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御座席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます御用命の節お呼出しの電話は

南四七一一番で御座ゐます

切符賣場右指定席切符は當日發賣さも正面西側本家入口にて發賣して居ります。

二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します。

尙多人數様お団体様のお申込も御相談いたします。

昭和八年五月卅日停刊
昭和八年六月一日發行

大塚・四ツ橋文藝座
發行人 大塚 耳 三

編輯人 成 山 桂 三

印刷所 永井太三郎

大塚市西區土佐通一丁目
印刷所 永井日英堂印刷所

青葉の六月に
皆様の御集は
文樂座の御宴會を

御利用下さい

金 四 圓 也 御一名様

御観覧は 一等 椅子 指定 席

お食事は 氣の利いた卓子で.....
(和食・洋食の設備有之候)

記念寫眞 お揃に人形を入れて撮影
(即日お持帰出来御人数だけ差上げます)

お申込は 二十人様以上に願います

なるべく五日前にお申聞け下さい
ますればいゝお場席が出来ます

御照會の電話は

南 四 七 一 一

(文樂御宴會係へ)

加賀見山甚舊錦繪
 艷容女舞衣
 芥萱桑門築紫鞆
 糸次兵衛
 喜多八
 道中膝栗毛

卜
 目
 粉

